

こどもと関わる仕事をしているみなさんへ

- 専門的な立場でこどもの育ちに関わる人へ向けた -
はじめての100か月の育ちビジョン
取組事例集

みんなで大切に
『はじめての100か月』

こどもまんなか
こども家庭庁

Contents

◆ 「はじめの100か月の育ちビジョン」とは	3
◆ 「専門的な立場でこどもの育ちに関わる人」とは	4
◆ この事例集で伝えたいこと	5
◆ 実践事例の紹介	
01 ごちやまるクリニック（医療機関／石川県輪島市）	6
02 小石川医師会（医療機関／東京都文京区）	8
03 学校法人リズム学園 あいおい子ども園・はやきた子ども園（幼児教育・保育施設／北海道恵庭市・北海道勇払郡安平町）	10
04 小池保育園（幼児教育・保育施設／新潟県燕市）	12
05 わかな保育園（幼児教育・保育施設／茨城県水戸市）	14
06 たまり場ぼぼ（子育て支援施設／茨城県ひたちなか市）	16
07 八戸市子育てつどいの広場 こどもはっち（子育て支援施設／青森県八戸市）	18
08 幼保連携型認定こども園 あがた幼稚園（子育て支援施設／宮城県日南市）	20
09 もろどみ広場（社会福祉協議会／佐賀県佐賀市）	22
10 大田区社会福祉協議会（社会福祉協議会／東京都大田区）	24
11 奈良市社会福祉協議会（社会福祉協議会／奈良県奈良市）	26
12 神河町民生委員児童委員協議会（民生委員児童委員協議会／兵庫県神崎郡神河町）	28
13 北区民生委員児童委員協議会（民生委員児童委員協議会／東京都北区）	30
14 大阪府豊中市第1地区民生・児童委員協議会（民生委員児童委員協議会／大阪府豊中市）	32
◆ 【2026年2月24日開催】 多職種による「はじめの100か月の育ちビジョン」推進のための懇談会	34
◆ 専門的な立場でこどもの育ちに関わる人としてすぐに実践できることは何か？	35

「はじめての100か月の育ちビジョン」とは

こどもの誕生前から小学校1年生までの「はじめての100か月」は、生涯にわたるウェルビーイング（身体的・精神的・社会的に幸せな状態）の基盤を築く、極めて重要な時期です。

「はじめての100か月の育ちビジョン」は、こども基本法の理念を踏まえ、こどもの誕生前から小学校1年生までのこどもの育ちを、社会全体で切れ目なく支えるための理念と基本的な考え方を示したものです。

こども基本法の理念にのっとり整理した5つのビジョン

ビジョン 01

こどもの権利と尊厳を守る

全てのこどもに権利があります。こども一人ひとりの思いや願いを大切にしていきます。

ビジョン 02

「安心と挑戦の循環」を通してこどものウェルビーイングを高める

こどもは、おとなとの「アタッチメント（愛着）」＜安心＞を土台として、遊びと体験＜挑戦＞を繰り返しながら成長していきます。

ビジョン 03

「こどもの誕生前」から切れ目なく育ちを支える

こどもの成長に応じた環境の変化が育ちの「切れ目」を生まないように、全ての関係者で連続して育ちを支えることが重要です。

ビジョン 04

保護者・養育者のウェルビーイングと成長の支援・応援をする

こどもに最も近い存在の保護者・養育者がこどもとともに育つことができるように、様々な人や機会を支えていきます。

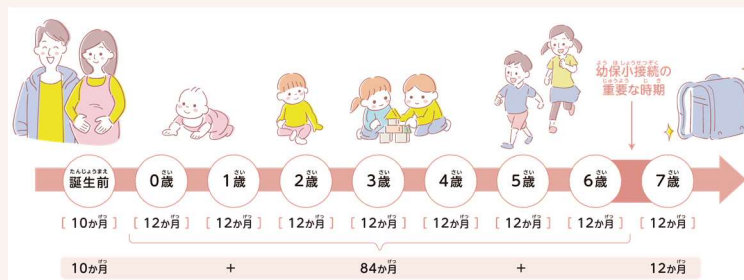
ビジョン 05

こどもの育ちを支える環境や社会の厚みを増す

こどもや子育てに直接関りがある人も、ない人も、全ての人がこどもの育ちにとって大切な役割を担っています。

「はじめての 100か月」

とは？



- こどもの誕生前から、小学校1年生までが、だいたい100か月（※）。
- この時期に、こどもは様々な人やモノ、環境との初めての出会いを繰り返し育っていきます。
- 長い人生において、人格の基盤を築く、はじめての重要な時期というメッセージが込められています。

※誕生月によって変動あり。94～106か月→概ね100か月。

ウェルビーイングとは？

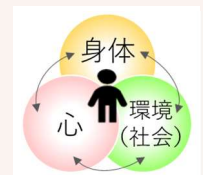
「はじめての100か月の育ちビジョン」では、「幸せな状態」を身体、心、それを取り巻く環境や社会の状況、すべての面で良い状態にあることとして捉えており、これを専門用語で「ウェルビーイング」と呼んでいます。

バイオサイコソーシャルとは？

人間は、「身体」や「心」、「周りの環境や社会」によって、形づくられています。

これら3つの状況を全体として見ることで、こどもがどのような状態にあるかを把握することができます。

これらを保障することは、すべての人のウェルビーイング向上につながります。



冒頭にもある通り、「はじめての100か月」は、生涯にわたるウェルビーイングの基盤を築く、極めて重要な時期です。

一方で、現状では、誕生・就園・就学といったライフステージの変化や、家庭・園・関係機関・地域などの間に多くの「切れ目」が存在し、こどものひとしい育ちが保障されなかったり、こどもに最も近い保護者・養育者が地域で孤立してしまったりする課題を抱えています。

こうした課題を踏まえ、誕生前から幼児期までのすべてのこどもの育ちを、ひとしく切れ目なく支えるための共通の考え方が必要であったことから、「はじめての100か月の育ちビジョン」が策定されました。

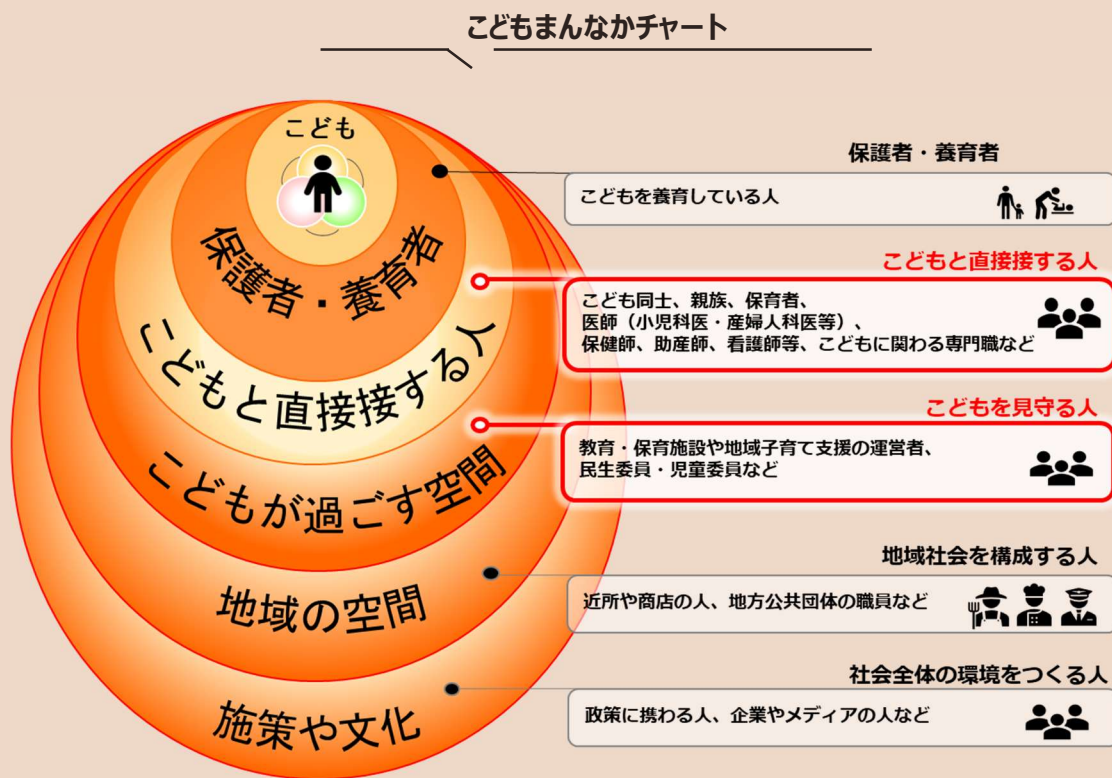
「はじめての 100か月の 育ちビジョン」 はなぜ必要？

「専門的な立場でこどもの育ちに関わる人」とは

この事例集では、「専門的な立場でこどもの育ちに関わる人」をターゲットに、地域全体でこどもの育ちを切れ目なく支えるための様々な取組事例を紹介しています。

この事例集において、「専門的な立場でこどもの育ちに関わる人」は、以下のような職種の方を想定しています。

- | | | |
|--|--------------|----|
| ■ 幼児教育・保育施設の職員 | ■ 子育て支援施設の職員 | |
| ■ 医師、歯科医師、薬剤師、保健師、助産師、看護師、管理栄養士、歯科衛生士等の医療関係者 | | |
| ■ こどもの育ちを支える社会福祉協議会の職員 | ■ 民生委員・児童委員 | など |



「専門的な立場でこどもの育ちに関わる人」に期待されている役割

「はじめの100か月の育ちビジョン」において、専門的な立場で日々こどもや保護者等を最も近くで支えている皆さんは、こどもと日常的に密な関わりを持つことができ、「こどもの育ちの質を考える上で特別な存在」とされています。

こどもの育ちを切れ目なく支えていくため、ビジョンにおいて、皆さんには大きく以下のような役割が期待されています。

専門的な立場でこどもの育ちに関わる全ての人に求められることとして…

- ☐ 多職種で連携したり、専門的知見を持たない人と協働してこどもの育ちを支える際には、ビジョンに示す理念や基本的な考え方を共通言語として活用しつつ、適切に専門性を発揮すること

特に保育者、子育て支援員、教育・保育施設や地域子育て支援の運営者などには…

- ☐ 教育・保育の専門性を活かして、各家庭への支援を行ったり、地域との連携を図ること
- ☐ 保護者・養育者に寄り添い、その成長を支援・応援すること
- ☐ 学童期以降の支援につなぐ橋渡しを行うこと

このほか、職務の中でこどもの育ちを支える人には…

- ☐ 乳幼児期の育ちについて理解を深めること
- ☐ それぞれの専門性を生かしてこどもの育ちの質の充実を図ること

この事例集で伝えたいこと

職種や施設の垣根を越え、「はじめての100か月」を社会全体で支えるために

すべてのこどもの「はじめての100か月」を切れ目なく支え、保護者・養育者のウェルビーイングを実現するためには、こどもに関わるすべての人と本ビジョンの考え方を共有し、それぞれの立場での具体的な行動につなげていくことが重要です。

本事例集は、全国各地の実践事例を通じて、地域の多様な主体が連携して、誕生前から幼児期までのこどもの育ちを切れ目なく支えるためのヒントを共有することを目的として作成しています。

なお掲載している取組事例は、特に、ビジョン3（「こどもの誕生前」から切れ目なく育ちを支える）、ビジョン5（こどもの育ちを支える環境や社会の厚みを増す）に資するような取組を優先的に選出しています。以下のような視点にも注目しながら、事例を読み進めてみてください。

✓ ビジョン3の視点：職種を超えた連携による「切れ目のない育ち」の保障

こどもの成長に応じた環境の変化が育ちの「切れ目」を生まないように、全ての関係者で連携して育ちを支えることが重要です。職種を超えて互いに協力し合うことで、これまで以上に、地域全体で切れ目のない支援を実現することができます。

✓ ビジョン5の視点：地域の様々な人が関わり合うことで、こどもの育ちを支える「環境や社会の厚み」を増す

専門的な立場でこどもの育ちに関わる方はもちろん、地域住民、学生、企業、NPOなど多様な主体が関わることで、こどもの育ちを支える環境はより豊かになります。
日々こどもや保護者等を一番近くで支えている皆様がつなぎ役となり、こどもの育ちを地域全体で見守り、支え合う実践を広げていくことが重要です。

事例集の活用方法

01 自分の職種「以外」の事例にも目を通して見る

02 「誰と、どのようにつながるか」を考える

03 「活動の理念」と「ビジョンとの関係性」をヒントに、自施設に置き換える

- ✓ 本事例集に掲載されている取組は、先進的なものから、日々の業務の中で少し工夫すれば真似できる身近な取組まで様々です。この事例集を、皆様の施設や地域における「新たな一歩」を踏み出すためのヒントとして、ぜひご活用ください。
- ✓ また、事例集の最後には、「専門的な立場でこどもの育ちに関わる人として、すぐに実践できることは何か？」を考えるページを設けています。事例集を読み終えた後、ぜひご自身やスタッフの皆様で語り合い、すべてのこどもの「はじめての100か月」を地域全体で支えるための、小さな一歩を見つけてみてください。

各事例には、主な分野と関連機関が一目で把握できるよう、連携する専門職や機関を分類ごとに色分けしたアイコンを掲載しています。それぞれの色が表す役割や分野を知り、事例を読む際の手がかりや、地域でのネットワークづくりのヒントとしてご活用ください。

事例集の「専門職・連携機関アイコン」の見方

分野	アイコンカラー	主な役割	アイコン例
医療・保健の専門職	ブルー系	医療的な視点から、こどもや保護者等の育ちを支える専門職	小児科医 歯科医師 総合診療医 看護師 助産師 保健師 栄養士 薬剤師 歯科衛生士 作業療法士
教育・保育・子育て支援施設・団体	イエロー系	こどもの日常的な育ちや日々の子育てを支える施設や団体	子育て支援施設 幼児教育・保育施設 学校 児童館 社会福祉協議会
心理・福祉の専門職	ピンク系	精神面や生活面での困りごとに寄り添い、専門的に支援する職種	臨床心理士 公認心理師 ケアマネージャー スクールソーシャルワーカー
地域・ボランティア	グリーン系	地域に根ざし、社会全体でこどもを見守り支えるためのキーパーソン	民生委員・児童委員 地域住民 地域の専門家
行政機関	パープル系	地域の制度や仕組みを整え、公的な立場から子育てを支える機関	自治体
その他	グレー系	民間団体など、多様な形でこどもや家庭を支援する主体	その他（民間団体）

01 ごちゃまるクリニック

医療機関

ごちゃませ・まるごとの視点でこどもの育ちを支える

石川県輪島市



基本情報

医院名 : ごちゃまるクリニック
所在地 : 石川県輪島市河井町23部1番地150
開院時間 : 月～金曜日 9:00～12:00 / 16:00～18:00(月・金のみ)

活動地域の概要

人口 : 19,734人(R7年12月時点)
特殊出生率 : 1.44(R4年)
活動地域の特徴 : 海や山に囲まれた自然豊かな環境で、のんびりと子育てができる街。伝統文化が根付き、地域全体でこどもを見守るコミュニティがある。

ビジョンとの関係性

ビジョン3／ビジョン5

妊娠期から学童期以降も、クリニックだけでなく様々な場を使ってこどもとの接点を作っている点は、ビジョン3の推進に寄与するものである。

また、地域住民としての立場も大切にしつつ、様々な専門職や地域住民と関わり合いながら、こどもの育ちを支えている点は、ビジョン5のこどもを支える環境や社会の厚みを増すことに寄与するものである。



活動の理念

ごちゃませまるごとの支えあいで、あなたらしく日々を過ごすことを応援する

多職種、多事業での相互作用の力を大切に「ごちゃませ」と、心だけでなく身体も、本人だけでなくその家族も、そんな家族が住む地域、地域が育む風土、文化…それら全てを「まるごと」応援することを大切にしている。

取組事例

01

妊娠期から学童期以降の育ちの切れ目ない支援

小児科医

助産師

保健師

はびまるカフェ

毎週木曜日にクリニックの待合室を使って、妊娠期・産後の保護者等と一緒に昼食を食べたり、ワークショップをして繋がり合う場。市内にお産ができる病院がない中で、公的な支援以外でも産前産後を支えたいとの市の保健師の思いを受け、助産師とも連携して取組が始まった。

学童期以降のこどもたちを支える取組

ごちゃまるクリニックの2階・3階には「わじまティーンラボ」があり、震災後、放課後に行く場所が少なかった10代の居場所となっている。また各学校を訪問し、遊びなどを通してこどもたちと自然な形で話をする「出張ラボ」も開催。学童期以降は医療の立場からこどものつながりを持続させることがなかなか難しい中でも、様々な接点や出会いの場を作ることを大切にしている。

医療の分野から、小学校以降のこどもと繋がりを持続させることは難しく、例えば中学生になって困ったことが出てきたこどもに出会っても、また0からの関係性作りをしなくてはけません。地域のお祭りでの関わりといったことも含め、何かあったときのその人の紙一重（思い出してもらえ選択肢）になれるよう、いろいろな場でこどもとの接点（フック）を増やすことを意識して活動しています。

妊娠期から子育て中、小学校、中学校、高校など、ずっと繋がり続けてもらわなくてもいいので、そのライフステージのどこかで接点を持てるようにできたらいいのではないかなと思います。



ごちゃまるクリニック副院長
NPO法人じゅくらあと理事長
小浦氏

ごちゃまいぴー

多職種で語り合う学びの場。ごちゃまるクリニックで定期的開催され、クリニックの作業療法士、看護師を中心に、小児科医、総合診療医、薬剤師、歯科医師、行政職員、ケアマネージャー等の地域のケアワーカーなどが集まる。医療・福祉・行政など、職種によって「その人」を見る見方が違うことから、その違いを理解し、患者さんの価値観を「まるごと」理解するためにもいろいろな人の視点で支えることを大切にするための取組である。個別具体的なケースを扱うこともあれば、仮のケースを想定して話し合ったり、テーマを決めて、ある職種の人に話をしてもらうこともしている。



こどものケースを扱うときに、こどもを取り巻くご家族の様子まで医療の立場から把握することは難しいです。その中で、日頃こどもの祖父母世代を見守っているケアマネージャーさんの視点を共有してもらうと、その家族の姿がよりよく理解できるようになり、ご家族への見方が変わることもあります。

医療の分野は、どうしても医師の見方で物事が進んでしまいがちな部分がありますが、お互いの視点・考え方を知り、どのようにしてフラットに語り合えるようにするかが大切だと考えています。



ごちゃまるクリニック副院長
NPO法人じゅくらあと理事長
小浦氏

地域住民としての語り合いも大切に

「ごちゃまいぴー」は専門職による語り合いの場だが、ごちゃまるクリニックの連携機関であるNPO法人じゅくらあとの取組として、保護者、学校の先生、地域住民が集まり、一つの講演を聞いて感じたことや日頃思っていることを語り合う場も設けている。大人どうしが繋がることや思いを共有できる場も大切にしており、例えば「保護者/先生」という関係性だけではなく、同じ住民としての目線で話ができるような場を創っている。



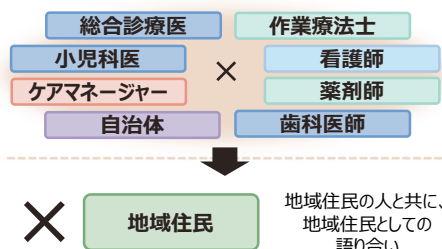
ごちゃまるクリニック副院長
NPO法人じゅくらあと理事長
小浦氏

輪島というコミュニティの中では、専門職と患者さんという関係だけでなく、患者さんにも私たち自身にも、地域住民としての顔、地域住民としての関わり合いがあります。楽しんでやれる範囲での線引きや、パーソナルな話題はこの場限りで置いておいていただくことの共有などは意識しつつも、お互いが地域の関係性の中で「まるごと」支え合えることを大切にしています。

一方で、全て自分たちでまかなうのではなく、手の届く範囲での活動や限界点も意識しつつ、自分たちでできない部分は誰かが代わりに支えとなれるよう、ゆるく繋がり合うことを大切にしています。

たとえ核家族化が進む別の地域であったとしても、「ごちゃまぜ・まるごと」の視点でその人を見ていくことの大切さは変わらないのではないかなと思います。

連携により生まれた効果（まとめ）



多職種でそれぞれの視点を共有しながら、職種による視点の違いを互いに理解するとともに、「その人」をまるごと様々な視点から見ることで、「その人」のより良い理解・支援に繋げることができている。

地域住民の立場から互いに安心して話せる場を作ることで、職種の違いを超え、大人どうしが安心して関わり合える場が生まれている。

今後の
展望

ごちゃまるクリニックの連携機関である一般社団法人ごちゃあとの取組として、クリニックの向かいの空き家を買取り、リノベーションすることで、輪島の外から復興期のケアを学びに来た人が中・長期滞在しながら、地域住民と交流できるような場を作りたいと考えている。復興の過程で、今まで大切にしてきたことを見つめ直す時期に来ており、そのプロセスでは、外から来た人の視点を交えて考えていくことが大切だと感じている。

より詳しく知りたい方はこちら：<https://gochamaru.com/>

02 小石川医師会

医療機関

医療の力で子育ての不安を早期に受け止め、地域の支援につなぐ

東京都文京区



基本情報

法人名 : 一般社団法人小石川医師会

所在地 : 東京都文京区小石川5丁目6番9号

活動地域の概要

人口 : 23.6万人 (R7年12月時点)

特殊出生率 : 1.12(R5年)

活動地域の特徴 : 幼少期から通える国立の学校も多く、教育に関心のある家庭が多く集まるエリアにもなっている。「初孫講座」「びびよ広場」など区主体の取組が複数ある。

ビジョンとの関係性

ビジョン4/ビジョン5

- ・ 医療機関外でも相談できる場をつくり、保護者等の不安を放置させない。
- ・ 小児科医が“入口・ハブ”となり、保健・子育て支援・地域資源へつないで切れ目を減らす。
- ・ 情報過多の時代に、保護者に寄り添いながら伴走し、親子の安心とこどもの育ちを支えている。

このような取組は保護者・養育者のウェルビーイング向上につながるものであり、また医療の立場からこどもの育ちを支える厚みが増すように取り組んでいる点で、ビジョン4及びビジョン5に寄与するものである。

活動の理念

小児科医として病気や身体面での困りだけを診るのではなく、相談支援の中で親子の背景や不安をまるごと受け止めることを実践しており、バイオサイコソーシャルの観点を大切にしている。また、親を責めずに“保護者が安心して育てられる”状態をつくることで、こどもの育ちを支えることを大切にしている。

取組事例

01

園・医療・支援機関をつなぐ取組

小児科医

幼児教育・
保育施設

自治体

小児科が幼児教育・保育施設やこども家庭センター等の関係機関と連携することで、保護者等が孤立して不安を抱え込まないようにし、相談・支援につながる導線を整備している。

幼児教育・保育施設との連携

園医として園に入居中で、医師自らこどもに絵本の読み聞かせをしてこどもの様子を見たり、保育士等に対し、園で生じる困りごとについて医療的な視点からアドバイスを行っている（感染症対応、受診目安、保護者への伝え方、発達・生活の気づき等）。

こども家庭支援センターとの連携

保護者等との面談に同席するなどし、医療の視点から保護者等の悩み相談に応じ、自治体職員の知見だけではカバーできない部分を支えている。

子育ての困りごとは「病気」だけでなく、睡眠・食事・発達・養育不安など生活全体に及びます。医療の側にいる私たちが園の現場や家庭の背景事情を知らないまま診察を行うのでは、支援がずれ違ってしまい、結果として保護者の不安は多くなってしまいます。

そのため、関係機関との連携のもとで、保護者が少しでも迷ったり悩んだりした段階で相談できる体制を作っておくことがとても重要だと考えています。

困ったことがあれば、気軽にかかりつけ小児科医に相談してみてください。



吉村小児科
院長 内海裕美氏

ベビーカーで参加できる地域の施設で、医師会事業として月1回の子育て支援セミナーを実施している。

特定の医療機関の受診者に限定せず「誰でも来られる」形で保護者等が気軽に参加できる場を確保している。

当日は30分程度のミニ講話となんでも子育て相談を行い、「外来で聞きそびれたこと」「ネット情報の真偽が分からない」といった不安をその場で確認できるようにしているだけでなく「どんな習い事をしたらいいか」といったことまで何でも気軽に相談できる場となっている。

継続的な開催により相談の敷居を下げ、育児不安の軽減と早期の相談行動（虐待予防への波及）につなげている。

【会場】地域活動センター等
【頻度】月1回
【時間】13:30～15:30
【対象】主に0～2歳の親子（未就園児中心）
【周知】医師会HP・チラシ等



セミナーの様子

研修医時代に虐待が疑われる子どもと出会い、「病気だけを診ていては、子どもを守れない」と痛感しました。虐待がなぜ起こってしまうのかを考えた結果、保護者も不安や孤立で追い詰められる状況の中、保護者を責めずに、保護者自身が安心できる状態につなぐことが虐待予防にもなると考えました。

セミナー当日は保護者からの不安をその場で確認できるようにするとともに、絵本と童謡などを通じて親子で楽しめるようにし、家庭でも親子の関わりが増えるように工夫しています。

自院への誘導はせず、「分からない」と言える場を守ること、月1回の開催を続けることで、地域の“いつもの相談先”になるように取り組んでいます。



吉村小児科
院長 内海裕美氏

バイオサイコソシャルの観点

病気などの身体的な側面だけではなく、親子の心理的な状態、こどもの家庭環境や社会的な背景など、まさにバイオサイコソシャルのすべての視点からこども・保護者等の置かれた状況を見ることが、こどもの育ちを支えることを大切にしている。

「はじめの100か月」の親子と地域のつながりで大切にしている観点

- ・ 病気だけでなく、子育ての不安を早期に把握し、適切な支援につなぐ
- ・ “分からない” と言ってよい場所をつくる
- ・ 保護者等のニーズを把握し、“なぜそうなるか” を一緒に考える
- ・ 保護者等が明るくなることが、結果としてこどもの育ちを支えることやウェルビーイングの向上につながる

連携により生まれた効果（まとめ）

小児科医



幼児教育・
保育施設



園で生じる困りごとについて医師に相談できる関係があることにより、こどもの育ちの質を高めることにつながっている。

小児科医



自治体



自治体ではなかなかカバーしきれない医療的な側面からの保護者の相談支援に応じていることで、保護者等の不安軽減と早期支援（虐待予防も含む）につながっている。

今後の展望

- ・ 全国の医師会でこのような子育て支援の取り組みをしてほしい
- ・ 全国の自治体の要保護児童対策地域協議会に地域の小児科医が参加してほしいと考えている。

より詳しく知りたい方はこちら：<https://www.bunkyo-med.or.jp/kosodate-seminar/>

学校法人リズム学園 03 あいおい子ども園/はやきた子ども園

幼児教育・
保育施設

地域の人・資源とつながる日常の保育

北海道恵庭市/北海道勇払郡安平町



基本情報

法人名 : 学校法人リズム学園
所在地 : 【あいおい子ども園】
北海道恵庭市相生町1丁目8番1号
【はやきた子ども園】
北海道勇払郡安平町早来大町156-33

活動地域の概要

人口 : 恵庭市… 70,114人(R8年1月時点)
安平町… 7,219人(R8年1月時点)
特殊出生率 : 恵庭市… 1.35(R5年)
安平町… 0.82(R5年)
活動地域
の特徴 : 恵庭市：北海道の稲作発祥の地。自衛隊の駐屯地が3つあり、転入者が多い。行政や地域の方々のつながりのある地域。
安平町：町全体で「教育・子育て」を政策の柱に据え、移住・子育て世帯へのバックアップも手厚い地域。

ビジョンとの関係性

ビジョン5

園を地域に開き、行政・商店街・企業・地域住民・保護者など多様な立場の人々が関わる機会をつくることで、保護者にとつての「子育てのパートナー」を地域に増やしている。園がハブ（調整役）になり地域のニーズを聴き、人や資源をつなぐ取組は、**こどもの育ちを社会全体で支える基盤づくり**としてビジョン5の推進に寄与するものである。

活動の理念

「人とまち、未来を開き繋いでいく」園が主体となって、陣頭指揮を執るのではなく、地域のニーズを聴き、困りごとに手を差し伸べられるよう、人・資源をつなぐ調整役になる。理念はトップダウンで押し付けるのではなく、職員が日々の実践や研修で得た気づきをもとに、最後に「それは地域と連携している実践だね」と紐づけて共有していくことを大切にしている。

取組事例

01

地域コーディネーターの関わり

幼児教育・
保育施設

地域住民

自治体

地域コーディネーターは地域のニーズを汲み取り、地域住民や団体、行政との間で調整役を担っている。「支援の橋渡し」として、保育士や医師等、多様な専門職の連携を促すネットワークを構築しているほか、妊娠前から小学校低学年まで「切れ目のない支援」を地域全体で調整し、専門職による伴走型支援をコーディネートする。また、地域の高齢者や商店等とこどもたちが触れ合う機会を創出し、子育ての厚みを増す役割を担う。

活動理念をどのように職員間で共有するか

月1回の会議や日々の事務所内の対話で、現場から上がってきた実践を振り返り、「地域とつながる実践」として理念に紐づけている。

またチャットツール等のICTで「今こうしている」を共有し、園内だけでなく学園内の実践も見える化している。加えて、全職員参加（リモート含む）の研修を行いつつ、外部での研修は、職員自ら参加したい研修を選べるようにしており、それぞれが得た学びを現場へ還元する中で、理念をより一層体現できるようにしている。

行政や商店街との距離の近さを生かし、地域のニーズを汲み取る「ハブ」として動いています。地域の困りごとに寄り添いながら必要な人・場所・支援へ繋ぐ「つなぎ役」となれるように意識しています。

活動例としては、こどもの「美容室ごっこ」をきっかけに地元美容師と連携して体験の場を設けたり、農家と協力した田植え体験や、高齢者による読み聞かせ、商店街での職場体験などをコーディネートしています。こうした多職種・多世代との交流は、こどもの視野を広げるだけでなく、保護者の孤立を防ぎ、地域全体を「子育てのパートナー」と感じられる環境づくりの支えとなっています。



あいおい子ども園
園長 村松良太氏

「えんじょい組」は、はやきた子ども園が運営する65歳以上を対象とした「高齢者クラス」である。地域の高齢者が園児と同じように入園し、週に一度、園庭での活動や季節の行事、給食などを通じて、こどもたちと共に過ごしている。

活動は単なる高齢者支援ではなく「教育活動」として位置づけられており、高齢者を「支えられる存在」ではなく、こどもと生活や学びを共にする仲間として迎えている点が特徴である。

こどもと高齢者がお互いに主体性を持って関わる中で、こどもたちは遊びを教わったり、高齢者の方々と関わる中で、自然と助け合いや多様性を学ぶことができる。また高齢者にとっても、多世代交流が孤独感の解消や生きがいに繋がっている。



えんじょい組は、地域の高齢者の声をきっかけにはじまりました。「園に通いたい」という本人の願いを受け、教育活動として正式にクラス化しました。

高齢者は「必要とされる喜び」を得て生きがいを実感できており、こどもたちも高齢者の歩み寄りに合わせて自然に助け合うなど、多世代共生による豊かな学びの効果が生まれています。



はやきた子ども園
園長 福田剛氏

地域と共に切れ目なく育ちを支えるための取組

こども園の中に地域住民が継続的に関わる“仕組み（クラス）”として「えんじょい組」を置くことで世代間の関わりが日常化し、こどもの育ちが園内だけで完結せず、地域で支えられる育ちへと広がっている。

また、保護者等にとっても、地域に子育てを支える相手が広がる取組となっている。こうした日常の風景が保護者の安心感にも繋がり、地域全体が「子育てのパートナー」として機能する多世代共生の教育環境が構築されている。

地域とのつながりを生み出すために

地域コーディネーターの活動を通じて、行政や商店街と連携し、こどもの興味に「本物の体験」で応えることで、こどもの多様な学びの場を創出している。

また、えんじょい組など、地域の高齢者が園に関わる入口を継続的に設けることで、園と地域との接点を日常の中に生み出している。こうした積み重ねが、こどもの育ちを地域で支える土壌づくりにつながっている。

連携により生まれた効果（まとめ）

幼児教育・
保育施設



地域住民



園がハブとなり地域のつなぎ役を担うことで、保護者等の孤立を防ぎ、地域全体が「子育てのパートナー」と感じられる環境づくりにつなげている。

幼児教育・
保育施設



地域住民
(高齢者)



園児と高齢者世代が共に生活することで、世代・立場を越えた関わりが自然に生まれ、多世代共生による豊かな学びの効果が生まれている。

今後の展望

これまでに実施してきた活動を通じ、こどもが多様な大人と対等に育ち合う環境を構築してきた。今後はこの「多世代共生」をさらに深化させ、世代を超えた一体感を醸成していく。地域全体が「こどもの育ちの場」として機能するよう、園が地域のニーズを吸い上げるハブとなり、行政や民間と連携して子育ての課題を解決する仕組みを強化することで、幼児期から高齢期まで、誰もが当たり前に居場所を持ち、地域全体で支え合う「共助」の社会の実現を目指している。

より詳しく知りたい方はこちら：<https://www.rhythmkgakuen.com/>

04 小池保育園

幼児教育・
保育施設

こどもの主体性を起点に、探究活動から地域とのつながりを生み出す

新潟県燕市



基本情報

法人名 : 社会福祉法人浄勝会 小池保育園

所在地 : 新潟県燕市小池1615

活動地域の概要

人口 : 75,254人(R7年12月時点)

特殊出生率 : 1.41(R3年)

活動地域の
特徴 : 工業都市である燕市では、子育て中の女性の就業率が高く、共働きの家庭が多い。

ビジョンとの関係性

ビジョン2／ビジョン4／ビジョン5

探究活動は、こどもの「やってみたい」を出発点に、安心できる関係性の中で挑戦と学びを積み重ねる取組である。その過程で**地域の人・場・知恵**とつながり、**地域へ出向いたり、園に招く往復を通じて、園を越えた育ちの環境を広げている**。また、**公認心理師による相談や行政・団体との連携**によって、保護者支援を地域へ展開している。これらの取組は、ビジョン2、ビジョン4及びビジョン5の推進に寄与するものである。

活動の理念

こどもの「つぶやき」や「やってみたい」を丁寧に拾い、活動を“行事”で終わらせず、家庭・地域へひらいていく。園が前に出て指示するのではなく、こどもの関心に沿って環境を整え、必要なときに家庭の知恵や地域の人・資源につなぎ直すことで、こどもの学びと育ちを深めていくことを大切にしている。

取組事例

01

こどもの「やってみたい」から広がる探究と地域連携

幼児教育・
保育施設

地域住民

園では、こどもの「気づき」「つぶやき」「もっと知りたい」を出発点に探究活動を展開している。たとえば、バケツ稲では、家庭から土や苗を分けてもらい、成長の変化を観察しながら、収穫時には保護者等・祖父母が鎌を持参して一緒に作業するなど、生活の知恵や技術が園に持ち込まれた。玉ねぎ染めでは「干す」ことへの関心から、ドライフルーツづくり、さらに地域の魚屋とつながって干物づくりへと活動が発展し、食や命への理解を深めた。こうした“園内で完結しない探究”を通じ、こどもは地域の人・場・知恵と出会いながら、社会の一員としての実感をもって学びを重ねている。

活動理念をどのように職員間で共有するか

園では、こどもの「やりたい」という思いを職員が園長に相談し、園長がそれを前向きに受け止めたうえで、活動の意義や注目すべき視点を対話の中で共有している。あわせて、こどもの発言や活動の様子を写真やメモで記録・可視化し、職員間で振り返りを行う。さらに、保育士が専門職と協働して多角的にこどもを捉えることや、保護者・地域の人々を巻き込み、ともに見守る実践を積み重ねることで、理念を具体的な行動として共有している。

探究活動に力を入れているのは、こどもの「やりたい」という思いを、社会との関わりの中で大切にしたいからです。園では、地域の人を稲作や干し柿づくりの「達人」として招き、実際に教わりながら体験する機会をつくっています。

さらに、市場から仕入れた本物の魚に触れるなど、地域の知恵や生業につながる“本物の体験”を重視しています。また、高校生や地域住民など多世代との交流も取り入れています。支援する・されるにとどまらず、地域全体が「共に育つ」関係になり、重層的に見守れる環境づくりを大切にしています。



小池保育園
丸谷日和氏



小池保育園
和田佳子氏

公認心理師が園に在籍し、地域の子育て世帯が抱える不安や悩みを、安心して相談できる窓口を設けている。相談は深刻化してからではなく、日常の迷いの段階から受け止め、必要に応じて保育者とも連携しながら支援につなげている。



相談に来られる方の多くは、「答えがほしい」というよりも、気持ちや状況を整理したい段階にあります。

話を丁寧に受け止めながら、何に困っているのかを一緒に言語化し、家庭でできる工夫や、園での関わり方のヒントを具体化します。必要に応じて保育者とも共有し、「家庭・園・地域」が同じ方向を向いて支えられるようにつなげています。



公認心理師
丸山マチ子氏

地域と共に切れ目なく育ちを支えるための取組

公認心理師が園の一員として常駐し、子育ての悩みを早い段階で受け止める「相談の入口」を構築するとともに、週1回の支援ルームやSNSでの発信、離乳食等の日常的なテーマ設定により、外部家庭も含めた早期の接点を創出し、保護者等や住民が継続的に交流できる場を維持することで、こどもを地域全体で支える土壌を育んでいる。

また相談内容に応じて行政や小児歯科等の多機関と連携し、地域の文化や暮らしに即した寄り添いを行うことで、家庭の孤立を多層的に防いでいる。さらに、現場で保育者と共に汗をかきながら、研修等で得た知見を日々の実践に還元し、心理的専門性と現場視点を融合させることで、多角的にこどもを捉え、園全体の保育の質向上と「共に学び育つ」文化を醸成している。

加えて、公認心理師が園内外の「ハブ」になり、多層的に地域連携を主導している。相談会や他の専門職とのコラボ講演会を通じ、専門職と住民が直接出会う「顔の見える関係」を構築。市内の支援センターでの講師活動等のアウトリーチを継続することで、地域における園の安心感を高めている。支援を専門職だけで完結させず、行政や地域の居場所へ適切につないでいる。

心理と保育の専門性を生かした支援

本事例で紹介している公認心理師は、保育士養成課程の大学を修了し、保育士資格を持った上で保育現場で保育士としての実践経験を有している。保育の基礎知識と実践知を踏まえつつ、心理師資格を取得することで、保育専門職としての多面性が開かれている。こどもや保護者、地域の子育てなどの状況に対し、保育士としての専門的判断に加えて心理的専門性に基づいた相談や支援体制の構築が可能になり、家庭や地域への子育て支援の取り組みがより活発、かつ持続的なものになっている。

連携により生まれた効果（まとめ）

幼児教育・
保育施設



地域住民



こどもの「やってみたい」を起点とした探究活動を通じて、園の活動に地域の大人が継続的に関わる機会が生まれ、地域全体でこどもを見守る関係が厚くなる。

幼児教育・
保育施設



公認心理師



公認心理師による相談支援や地域連携を通じて、保護者等が不安や悩みを早期に言語化することができたり、園の外でも保護者や地域住民と繋がることができている。

今後の展望

地域とのつながりをさらに広げ、深めていくことを目指し、外部の多様な専門性を持つ人々を園の活動に積極的に取り入れる「多職種連携」への挑戦も視野に入れている。在園児だけでなく、地域に暮らすすべての人にとって「利用価値のある開かれた場所」となり、多様な大人がこどもに関わり互いに刺激を受け合う「双方向の育ち」の場としてアクションし続け、地域社会のハブとして機能し続ける未来を展望している。

より詳しく知りたい方はこちら：<https://koike-kodomo.jp/care/>

05 わかな保育園

幼児教育・
保育施設

園と地域が、食でつながる ～わっかなマルシェの地域循環～

茨城県水戸市



基本情報

法人名 : 社会福祉法人栄寿会 わかな保育園
所在地 : 茨城県水戸市根本2丁目582
開園時間 : 7:00～19:00
休園日 : 日・祝

活動地域の概要

人口 : 265,690人(R8年2月時点)
特殊出生率 : 1.39(R3年)
活動地域の特徴 : 県都でありながら、少し車を走らせれば田畑が広がり、様々な規模・種類の農業に出会える。食を大切にする意識が地域に根付いており、納豆をはじめとする、この地の食文化も継承されている。

ビジョンとの関係性

ビジョン5

農家やJA、地域の専門家など、多様な人々と連携することで、**地域全体でこどもの育ちを支える体制を形成**していることはビジョン5の推進に寄与する。

活動の理念

わかな保育園では、「食べることは生きること」「保育は“暮らし”であり、暮らしの中でうまれる“工夫”こそ学び」という考えを土台に、何かを“教える”のではなく、こども自身が体験を通して学び取っていく環境を整えることを大切にしている。

取組事例

01

マルシェを通じた地域のつながり ～わっかなマルシェ～

幼児教育・
保育施設

地域の
専門家

わかな保育園では、月1回「わっかなマルシェ」を園内で開催し、JA水戸有機農業研究会に加盟する個人農家が来園して、自ら育てた有機野菜を販売している。場所は、保護者等の送迎時間に合わせた園内の一角で、生産者が保護者と対話しながら購入してもらうスタイルである。

園の給食では、有機野菜をJA水戸有機農業研究会や地元の有機農家から仕入れており、マルシェでは給食で使っている野菜と同じものを家庭でも買えるようにしている。

開催のきっかけは、保護者等からの「有機野菜を買いたいが買える場所がない」「子どもを連れてスーパーに寄って買い物をするのが負担」という声だった。園に通う日常の動線の中に“買える場”を置くことで、保護者の負担を減らしながら、食への関心を家庭へつなげている。

売上には園は関与していないが、マルシェを通して、生産者・保護者等・園が日常的に顔を合わせ、食を手がかりに地域とのつながりが育まれている。



活動理念をどのように職員間で共有するか

園長が一方向的に示すものではなく、給食の在り方や日々の保育など、実践を通じて職員と共有している。こども主体の保育へと転換してきた経緯を職員と共に振り返りながら、「この取組は暮らしとして自然か」「こどもが自分で学び取れる環境になっているか」という視点を大切にしている。

私たちは「食べることは生きること」と思っています。給食は毎日の暮らしそのものですので、誰にとっても安心できる形にしたいと、アレルギーへの配慮を見直し、主要アレルゲン7品目を使わない給食へと見直しました。使える食材が限られてくる中で「限られた食材だからこそ品質を大切にしよう」と考えるようになり、有機野菜（オーガニック）の導入へとたどり着いたんです。

現在は100%有機食材の給食を実現しています。この食材探しをきっかけに、地域の農家さんや専門家の方々とつながりが生まれ、そこから発展して始まったのが「わっかなマルシェ」なんです。



わかな保育園
園長 大橋久絵氏

コロナ禍を経て、保育園が地域から見えにくい存在になっているとの課題意識があった。また、「不適切保育」という言葉が広がる中で、「私たちがどんなふうにも子どもと暮らしているか、保育園のことを皆さんにもっと知ってもらいたい、子どもの未来をみんなで考えたい」という考えのもと、園を地域に開く必要性を感じた。そこで、地域住民、生産者、行政関係者など幅広い参加を目的に「夢見る保育デー」を開催。ここでJA関係者との出会いが生まれ、米づくりが実現。子ども用の田んぼと大人の田んぼ（約2反）を確保し、保護者・地域・職員が手植え・手刈りを実施。年長児も代掻き（しろかき）等に参加している。



園の“課題”や“やりたいこと”を、園の中だけで抱え込まずに地域へ開いて、一緒に考える場にしました。「夢を見るなら本気でやってみよう」という思いから、給食をより良くし、地域としっかりつながることを目指して行動した結果、そこで出会った方々が次の一歩を共に踏み出してくれたのです。

偶然の出会いからJAの方との接点生まれ、「お米を作りたい」という私たちの一言をきっかけに協力の輪が広がり、田んぼを借りてのお米づくりが実現しました。

一つの出会いが次の協力へとつながっていく。そんな循環が生まれる場が『夢見る保育』です。



わかな保育園
園長 大橋久絵氏

地域と共に切れ目なく育ちを支えるための取組

園の理念を具体的な保育へとつなげ、保育の質を高めるために、地域の専門家（有機農業の技術者、林業関係者、栄養の専門家）と連携し、日々の保育実践に専門的な知見を加えている。給食では、外部の専門家と協働して献立づくりや栄養面の助言を受け、こどもの日々の食事環境の質を高めている。

園庭環境についても、木陰や水の環境、休息できる場のあり方を林業関係者と検討し、庭の森化を段階的に進めている。こうした取組は、園内外の専門性をつなぎ、保育に落とし込むことで、実践の中に新たな工夫や学びを生み出している。地域の専門性を保育に活かすことで、地域と共に切れ目なく育ちを支える環境づくりを推進している。

地域とのつながりを生み出すために

園を開くイベントは、発信の機会にとどめず、そこで得られた出会いや情報を次の取組へつなげるための起点としても位置づけている。実際に、夢見る保育デーでの出会いが、食材の仕入れや米づくり等の具体的な連携へ展開したように、地域とのつながりの中から新たな出会いに繋げている。

連携により生まれた効果（まとめ）

幼児教育・
保育施設



地域住民



園を開くことで顔の見える関係性が生まれ、地域の方と日常的につながる地域の循環が形成される。

幼児教育・
保育施設



地域の専門家



地域の専門家の視点が保育に加わることで、保育実践に広がりや深まりが生まれる。

今後の 展望

大学・研究機関等との連携を通じて、現在の保育実践を客観的に検証し、地域社会に発信していきたい。また、産前産後の家庭から高齢者まで、多世代が集える『地域の居場所（コミュニティ）』づくりや、学童と地元商店街との連携など、地域とのつながりをさらに広げ、地域全体でこどもの育ちを支える仕組みを深めていきたい。

より詳しく知りたい方はこちら：<https://www.wakana-hoikuen.com/>

06 たまり場ぽぽ

目の前の保護者の思いにとことん寄り添う

子育て
支援施設

茨城県ひたちなか市



基本情報

法人名 : 特定非営利活動法人たまり場ぽぽ
所在地 : 茨城県ひたちなか市高場1488-9 NS高場第2ビル102
業務時間 : 平日 9:00~17:00
休業日 : 不定期

活動地域の概要

人口 : 151,876人(R7年12月時点)
特殊出生率 : 1.43(R4年)
活動地域の
特徴 : ひたちなか市は、大企業や自衛隊施設があり、県外からの転勤族が多い地域。また、港湾部には水産加工会社等があり、外国人居住者も多く暮らすなど、多様な背景を持つ住民も多い。

ビジョンとの関係性

ビジョン4

こどもに最も近い存在である保護者等のウェルビーイングの向上が、こどものウェルビーイング向上において欠かせないという理念の下、保護者等の思いを徹底的に大切にしている点は、**保護者・養育者のウェルビーイングの実現に資するもの**であり、ビジョン4の推進に寄与している。

活動の理念

ママのウェルビーイングがこどものウェルビーイングには絶対に欠かせないという思いの下、「ママにとことん寄り添う」ことを活動理念としている。「保護者等をジャッジしない」、「目の前の保護者等の思いを大切にする」ことを実践するとともに、18歳までずっと親子の成長を支えること、いつでもここに来ていいということを保護者自身にも伝えている。

取組事例

01

子育てサロンでの活動理念の実践

子育て
支援施設

「保護者を一人にしない」「保護者の話をよく聴く」ことを重視している。例えば、こどもが子育てサロン側が提供する遊びのプログラムに興味を示さないことで、保護者等がストレスや焦りを感じたりすることがないように、あえて特定のプログラムを設けない自由な運営方式を採用するなど、日々の活動における細やかな配慮を含め、保護者の気持ちを大切にしたい取組を実践している。

活動理念をどのように職員間で共有するか

月に一度のスタッフミーティングでは、耳にたこができるほど、毎回必ず活動理念について伝えるようにしている。職員の雇用契約では、スタッフミーティングに必ず参加することを伝えており、保護者等との関わりの中で迷いや悩みが生じた際は、どのような対応が考えられるかを職員間で共有・協議できる機会を設け、理念に基づいた実践に繋げている。

スタッフミーティングでは、「ママにとことん寄り添う」という理念を毎回確認し、実践の中での迷いや悩みを共有するワークショップを行っています。私たちは専門家ではなく、ただのおばちゃんです。

以前、サロンでお子さんを見ずにスマートフォンばかり見ている保護者の方がいらっしゃいました。私たちは注意するのではなく、その方の背景を想像しながら温かく見守りました。すると、その方は次第に心を開き、笑顔を見せてくださるようになり、「もし、ぽぽがなかったら自分がどうなっていたか…本当にありがたいです」と言ってくれました。

保護者を否定せず、ありのままを受け入れる姿勢こそが、親子の安定と笑顔につながると実感しています。



NPO法人 たまり場ぽぽ
代表理事 早川愛氏

サロンに来館できない家庭こそ、社会的に孤立し支援を必要としているのではないかという問題意識を持っていた折、近隣で開催された「ホームスタート」の説明会に参加。

ひたちなか市でも取組を実施すべきとの思いの下、「ホームスタートを実施するなら行政と協働すべき」という助言も踏まえ、代表自らが何度も市役所へ足を運び交渉を重ねた。その熱意が行政を動かし、市と連携した事業の実施に至った。

現在は、研修を受けた地域の子育て経験者が家庭を訪問し、「傾聴」と「協働」を通じて親子の孤立を防ぎ、地域とのつながりを創出している。



2017年からホームスタート事業を行っています。ホームビジター（訪問ボランティア）は地域の子育て経験者です。毎年ホームビジター養成講座を実施し、現在は58名が活動しています。1年間に約50家庭を訪問し、これまで延べ337家庭、2328回の訪問を行ってきました。利用者だった方がビジターとして活動したり、たまり場ぼぼのスタッフになってくれています。

年2回行っているホームビジターのフォローアップ研修では、皆さんが賑やかに、和やかに交流されており、地域のおばちゃんパワーにいつも元気をもらっています。



NPO法人 たまり場ぼぼ
代表理事 早川愛氏

こどもの育ちを切れ目なく支えるための取組

学校

地域住民

妊娠期から18歳まで、継続して親子の育ちを見守ることを重視している。例えば、ホームスタートで繋がった保護者等とは、訪問期間終了後も子育てサロン、プレイパーク、子ども食堂につながり、LINE等で定期的に連絡を取り合い、精神的な不調や困りごとを抱えた際にもすぐに相談できる関係性を維持している。

また、転入者が多く「地域の学校情報が分からない」という保護者の声に応え、幼稚園・小学校・高校に関する情報交換会を開催。先生や保護者等を招いて説明会を実施するなど、学校等と連携した情報提供を行っている。ライフステージの変化に合わせたきめ細やかな支援により、親子が地域の中で安心して成長できる環境を整えている。

様々な関係機関とのつながりを生み出すために

スクール・ソーシャル
ワーカーその他
(民間団体)

「子ども食堂」では団体からの寄付があり、ひとり親家庭にはフードドライブなどを通じた食料支援を行っている。また、外国人保護者支援では幼稚園や学校、赤ちゃん訪問などに通訳者を派遣するなど、ニーズに合わせて多様な機関と連携している。最近では小学校ともつながり、地域全体で親子を見守る体制づくりを進めている。こうした関係を築くため、代表自身が常にアンテナを高く張り、会議への参加や気になる人に会いに行くなど、「顔の見える関係」を大切にしている。その姿勢が、企業や団体を巻き込んだ多角的な支援につながっている。

連携により生まれた効果（まとめ）

子育て支援施設



地域住民

自治体



ホームスタートの開始時から自治体と密に連携し、粘り強く協力関係を築いたこと、地域住民のボランティアも養成してきたことで、現在までの事業の継続に繋がっている。

子育て支援施設



学校

スクール・ソーシャル
ワーカーその他
(民間団体)

保護者等の困りを起点とし、様々な人・団体と協力して事業を行うことで、転入者が多い地域でありながら、乳幼児期のみならず学童期以降も親子が安心して生活できるようにサポートすることができている。

今後の展望

大きな企業や工場があり通勤族が多いという地域特性を活かし、市内企業と連携して、企業の福利厚生として子育て支援を提供する仕組みづくりを目指している。また将来的には、24時間365日いつでも親子が駆け込み、食事や宿泊も可能な「実家」のような機能を持つ居場所の設立を構想しており、2026年度に向けて準備を進めていく予定である。

より詳しく知りたい方はこちら：<https://tamariba-popo.net/>

親子の「学び」と地域の「つながり」を育む子育て支援

青森県八戸市



基本情報

法人名	: 特定非営利活動法人はちのへ未来ネット
所在地	: 青森県八戸市三日町11-1 八戸ポータルミュージアムはっち4F
開館時間	: 9:30~16:30
職員数	: 7名 ※個人ボランティアは登録数で100名を超える。 その他20を超える団体とつながり、活動を支えている。

活動地域の概要

人口	: 212,279人(R7年12月時点)
特殊出生率	: 1.21(R2年)
活動地域の 特徴	: 産後1年未満での職場復帰が増加傾向にある。

ビジョンとの関係性

ビジョン3/ビジョン4

かつて「こどもはっち」で育ちを支えられていた高校生が、ボランティアとして戻ってくるなど「**支えられていた側から支える側へ**」の好循環が生まれている点は、ビジョン3に合致。また職員間での認識共有を図りながら、保護者・こどもの姿を真ん中にとらえ、**保護者自身がこどもと育つことを応援・支援**している視点は、ビジョン4の推進に寄与している。

活動の理念

地域に根ざした「つながり」の重視

「保護者の方がこどもと一緒に育つ」、「共育ち」の理念を大切にしている。困ったときに専門職がすぐに関わけることは必ずしも難しい中で、その家庭がどのような地域で暮らしており、身近な人同士でどのように関わり合えるかという視点を大切にして支援・応援に取り組んでいる。

また、支援をサービスとして利用してもらうだけの関係で終わらせず、保護者自身の「学び」や「助け合いの精神がある」という視点も大切にしている。

取組事例

01

活動分野の違いを超えた連携

子育て
支援施設民生委員・
児童委員

地域住民

こどもはっちは、こどものために活動をしていた様々な団体がネットワークを作り、そのネットワークが母体となって団体が立ち上がった。「こどもが誰一人取り残されず育つ」「それがまちづくりにもつながる」という理念は、現在も総会などで毎回確認し、職員間で共有している。

現在の活動体制

職員はパートを含めて7名。市民ボランティアは、高校生も含め100名以上の登録者がいる。その他、20を超える団体や、地域の児童委員・民生委員とも連携しており、このうち常時連携をとっている人数は50名ほどとなっている。

どのような活動においても、一つひとつの取組を「こなす」ものにせず、「今、何のためにそれをやっているのか」という視点を大切にしています。その取組に参加したこども・保護者にどのような効果があるかについて、各取組を行う度に問い直し、原点に立ち返ることを徹底しています。

また、様々な団体が集まっているため、活動分野が違っても、最終的なゴールは「こどもの育ち」につなげることであり、その軸がぶれないよう、事業ごとに振り返りを行っています。

若い職員には理念を伝えるだけでなく、実践してもらいながら理念を落とし込んでもらうようにしています。それと同時に、ベテランの私たちが若手職員ならではの新しい視点を大切にするように意識しています。

NPO法人はちのへ未来ネット
代表理事 平間恵美氏

子育て支援ひろばでは、地域住民ボランティアや高校生を巻き込みながら、活動を実施。

また保護者等向けの相談支援では、市の保健師や小児科医とも連携しつつ支援を実施している。

さらに、登録不要の一時預かり事業では、遠くまでボランティアに行くことが難しいシニア世代の地域住民にも、一時預かりのボランティアとして参加してもらっている。



団体の目的のひとつに「親の学び」があります。長らく家庭教育の大切さを唱えてきましたが、若年層の保護者等には十分に浸透していませんでした。「家庭教育の大切さ」を、このビジョンをベースにして改めて伝え、大人や地域の方々が学び直す機会にしたいです。

例えば一時預かり事業では、単に「便利なサービス」として利用してもらうだけでなく、その裏には「助け合い」の精神があること、一時預かりを通じて親御さんの気持ちが少しでも楽になり、こどもと向き合う時間が作れるようにしたいと思っていることまで伝え、お互いに気持ちよく事業ができるようにしたいと考えています。

ビジョンの推進にあたっては、福祉の視点だけでなく「教育（親の学び）」の視点を融合させることが重要であると考えています。



NPO法人はちのへ未来ネット
代表理事 平間恵美氏

「はじめての100か月」を起点に、こどもの育ちを切れ目なく支える

こどもの成長と「支え合いの循環」の実現：かつて支援センターに通っていたこどもたちが成長し、高校生になってボランティアとして戻ってきている。自分が支えられた経験があるからこそ、若者たちが将来、親になったときも、再びこの地域で子育てをしたい、あるいは支えたいと思える「善意のサイクル」が形成されている。乳幼児から高齢者、そしてその間をつなぐ高校生が日常的に関わることで、地域全体でこどもを育てる「社会の厚み」が自然と作られている。

様々な状況にある「はじめての100か月」の親子とつながるために

インクルーシブな視点の広がり：対象を「こども」と広く括ると、障害のあるこども、遊びに来たくても来られないこどもなどがいたことから、月に一度、ハンディキャップを持つこどもだけで集まれる会を設けている。これまでリーチできていなかったハンディキャップを持つ家庭の声を聞けるようになり、そのハンディキャップをより理解するためのワークショップを実施するなど、何ができるかを一緒に考え、新たな事業に繋げることで、支援の形を広げている。

連携により生まれた効果（まとめ）

子育て支援施設

地域住民
(高校生)

自分が支えられていた経験があるからこそ、高校生になって「支える側」として戻ってくる、また保護者になってもこの地域で子育てをしたいと思える好循環が生み出されている。

子育て支援施設

民生委員・
児童委員
地域住民

活動理念の共有を図りつつ、様々な団体・地域住民が活動に関われるようにすることで、同じ目標の元、異なる立場・分野でこどもを支える地域住民がそれぞれ活躍することができている。

今後の 展望

精神科医やケースワーカーなど、医療・心理職との直接的な連携を求めている。現状では精神科の予約が取りにくいことや、地域に専門の心理士が少ないことが課題となっており、緊急時や深刻な相談の際に、専門家へスムーズにつなげる仕組みが必要。また、行政と連携はしているが、情報開示に壁がある。あきらかに問題がある家庭に関しては共有が必要と感じている。「個人情報」の壁を越える仕組みづくりを強く望んでいる。

より詳しく知りたい方はこちら：<https://kodomohacchi.site/>

08 幼保連携型認定こども園 あがた幼稚園

子育て
支援施設

こどもの誕生前から小学生までを切れ目なく支える取組

宮崎県日南市



基本情報

法人名 : 学校法人吾田学園 幼保連携型認定こども園 あがた幼稚園
所在地 : 宮崎県日南市吾田西3丁目9-28

活動地域の概要

人口 : 45,749人（令和8年2月時点）※日南市吾田地区
世帯数 : 20,958世帯
活動地域の特徴 : 人口約4.5万人の市に対し、産婦人科医院が2か所しかない状況であったが、そのうちの1つが高齢化により閉院するなど、周産期医療の受け皿減少という課題がある。

ビジョンとの関係性

ビジョン3／ビジョン4

誕生前～小学生までを「1つの流れ」で支える体制（0～5歳＋児童クラブ）を整え、**切れ目ない育ちの支援に取り組んでいる点**は、ビジョン3に寄与している。また、未就園児家庭の受け入れから、**産前産後の支援へと活動の幅を広げ、保護者等の安心・回復を支えている取組**は、ビジョン4の推進にも寄与している。

活動の理念

こどもが『何をしたいか／どんな時間を過ごしたいか』を問いかけ、のびのびとした環境の中で意欲や発見が生まれる保育を重視している。また保護者支援においても、一方的に『教える』ではなく、『一緒に活動しながら自然と本音が語れる場』を整えることを大切にしている。

取組事例

01

0～2歳の親子の居場所づくり～活動を通じた交流と相談支援～

子育て
支援施設

0～2歳の未就園児家庭を中心に、親子で来られる場を運営している。2歳児の入園が進むにつれて利用者の低年齢化（0・1歳）が進み、相談内容も乳児期特有の悩みを中心とするものへと変化している。支援は“講話中心”ではなく、ベビーマッサージや離乳食づくり等と一緒にしながら、自然に相談につなげる工夫をしている。当初は『十分に相談に乗れるか』という不安もあったが、育児経験のある職員が多く在籍している強みを活かし、『共感して聴く安心感』を軸とした息の長い活動を続けている。

活動理念をどのように職員間で共有するか

集会で集まる時間が限られるため、ICTを活用し、各拠点の活動・写真・気づきを共有。それぞれのクラスにiPad/iPhoneを置き、情報を残し、確認・共有できる仕組みで「園の楽しさ」や支援の工夫を横展開している。



こどもが問題を起こすのは、その子が『悪い』からではありません。背景には、家庭の事情やお母さんの孤独、妊娠期からの心の支え不足などが隠れていることが多いのです。

だからこそ私たちは、お腹の中にいる時から小学生になるまで、地域全体で切れ目なく寄り添える場をつくりたいと考えました。ここでは『何かを教える』ことよりも、一緒に笑ったり悩んだりする時間を大切にしています。その『安心感』の中でこそ、ボロリと本音が出る。そんな温かいつながりを目指しています。



あがた幼稚園
園長 伊豆元精一氏

未就園児家庭の利用が0歳中心に広がる中で、産前産後期の悩みが多く聞かれるようになり、当事者の声を受けて「産前産後から」の支援を開始。

助産師・看護師・栄養士が関わり、妊婦の食事や離乳食、沐浴、授乳・乳房ケアなどの実践を通して学びの機会を提供している。



ほぼ毎日、活動する施設を使い分けながら活動しています。滞在時間は2～3時間、長い方は4時間ほどゆっくり過ごされます。母親の心の安らぎも大切と思い、睡眠不足や体調が優れない時は、スタッフが赤ちゃんをお預かりし、お母さんがお昼寝できるスペースも用意しています。

授乳や離乳食の専門的な相談はもちろんですが、エコー写真をポスターにして誕生をみんなで喜び合うなど、幸せを共有できる工夫もしています。ありがたいことに予約がすぐに埋まってしまうため、『初めての方』と『継続の方』で枠を分け、新規の方も安心して一歩を踏み出せるようにしています。



助産師 山崎美穂氏

地域と共に切れ目なく育ちを支えるための取組

あがた幼稚園では、産前産後の妊婦相談・ケアから始まり、0～5歳の認定こども園、小学生の児童クラブと、こどもが成長しても、その育ちを切れ目なく連続して支えている。

さらに児童発達支援・放課後等デイ、病児病後児保育等の機能も備えており、障害の有無に関わらずこども同士が「仲間（先生）」として自然に学び合うインクルーシブな環境づくりを重視している。

地域とのつながりを生み出すために

隣接する産婦人科の閉院を機に建物を引き継ぎ、デイサービスや高齢者住宅等を整備。共有する園庭を介して高齢者・地域の人々が日常的にこどもを見守る関係が生まれた。

また、園庭の植栽や裏山の自然活用、地元漁師と連携した水族館作りなど、多様な業種の地域資源を巻き込み、点在していた存在を「線や面」につなげていく地域づくりを大切にしている。

連携により生まれた効果（まとめ）

子育て支援施設



助産師

看護師

栄養士



食事・離乳食・沐浴・授乳などについて専門的な相談支援を受けられることで、保護者等の不安が軽減される。参加者同士の関係も広がり、保護者のウェルビーイングの向上につながっている。

子育て支援施設



地域住民



デイサービス等と園庭を共有したり、多様な地域人材を巻き込むことで、地域の人々が日常的にこどもを見守る環境づくりに繋げている。

今後の展望

自治体や小学校との連携を強化し、0歳からの育ちの接続を深めたいと考えています。また、高齢者施設や地域資源を活用した多世代交流やインクルーシブ保育を推進し、妊娠期から切れ目なく地域全体でこどもを育てる社会を目指しています。

09 もろどみ広場

社会福祉協議会における子育て支援

社会福祉
協議会

佐賀県佐賀市



基本情報

団体名 : 諸富地区社会福祉協議会 もろどみ広場
所在地 : 佐賀県佐賀市諸富町諸富津47-1 諸富町公民館
開館時間 : 毎週火～水曜日 10:00～15:00
休館日 : 祝日、夏季休暇（お盆休み）、年末年始

活動地域の概要

人口 : 225,152人(R8年1月時点)
特殊出生率 : 1.41(R6年)
活動地域の
特徴 : 住民の地域に対する愛着心が強く、住民主体で子育て環境
を守ろうとする意識が高い点が特徴である。

ビジョンとの関係性

ビジョン5

「はじめの100か月」の親子への支援・応援の中で、**地域とのつながりを大切にしながら活動をしている点**は、こどもの育ちを支える環境や社会の厚みを増すことにつながっており、ビジョン5の推進に寄与している。

活動の理念

社会福祉協議会として子育て支援をしていきたい、という考えから活動を立ち上げ。「地域に根差した活動を行うことは、地域の活性化にもつながる」という信念の下、地域のおばちゃんとして自然な「見守り」を重視し、多世代が共に育ち合えるようにすることや、地域住民とのつながりを大切にしながら活動を進めている。

取組事例

01

中学校での乳幼児ふれあい体験

社会福祉
協議会

保健師

地域住民

市内の中学校や子育て支援ひろば（もろどみ広場）で、中学生と乳幼児親子のふれあい体験を行っている。

体験前には、市の保健師が命の尊さについて講義を行い、事前学習を経た上で、中学生が乳幼児の親子と触れ合う機会を設けている。

また、授業内だけでなく、昼休みを利用して学校内の空き教室で交流を行うなど、生徒が継続的に乳幼児やその保護者等と自然に関わる場を創出している。



今は子育ての経験が全くないまま、親になる方も非常に多いです。小さい頃から赤ちゃんに触れ合い、実際に関わって命の尊さを感じてもらうことはとても大切だと思っています。この取組は、中学校の校長先生にかけあって始まりました。中学生の中には、ふれあい体験後、弟や妹へのかかわり方が変わったという生徒さんもいるようです。



もろどみ広場
野口洋子氏



もろどみ広場
古賀智子氏

この取組に賛同し、参加してくださる乳幼児親子の方も多いです。若い世代の生徒さんたちに、自分たちの経験を伝えられることは、保護者の方のウェルビーイング向上にも資するものだと思っています。

市の補助対象となる地域子育て支援拠点が別の地域に移った後も、団体独自に子育て支援ひろば（もろどみ広場）を継続。地域住民による読み聞かせサークルや子育てサークルなどとも連携しながら、活動を実施している。併せて、こうした広場に来ることが難しい家庭とのつながりを持つためにホームスタート（家庭訪問型子育て支援）を開始。ホームスタートでの関係性をもとに、広場への利用につながることもある。

広場の拠点が移ることになったときは、かつての利用者の方などからも、「この広場はどうなるのですか」と問合せがありました。やはり地域に根差した場で、活動をしていくことは大切だと感じています。

私たちは専門家ではありませんが、ホームスタートを実施するための研修も受けており、安全安心に、そして家庭の状況によらず誰でも利用できるように、無料で実施をしています。ホームスタートの後にも、保護者の方からお電話をいただいたり、地域で顔を合わせることもあります。同じ住民の立場で、つながりを持てることはとても大切だと思っています。



もろどみ広場
真崎明美氏

切れ目なく育ちを支えるために

一度広場にきたものの、心理的なハードルを感じて利用しづらくなってしまったケースや、発達上の特性・ハンディキャップゆえに広場の利用が困難な家庭がある。こうした課題に対応すべく、家庭訪問型子育て支援のホームスタートを開始。個別に関係を深めることが安心感に繋がり、結果として広場への参加につながったり、地域住民との新たな関係構築へと結びつく事例も生まれている。

「はじめの100か月」の親子と地域のつながりで大切にしている観点

広場には、乳幼児親子だけでなく、プレパパ・プレママや祖父母、地域住民など多世代が参加できるようにしている。施設内には住民が気軽に立ち寄れるカフェスペースもあり、地域の中で自然と育ちあえる場ができている。

広場の運営には、地域の4つのボランティア団体が参画している。特定の専門職に依存するのではなく、各団体がローテーションで午前・午後に2名ずつ常駐する体制を構築した。

また、公民館で開催することで、サークル活動や図書館を利用した地域の方が広場に気軽に立ち寄ったり、遠くから様子を見守ったりと、親子に自然と声をかけあえるような場となっている。このように、親子が地域社会とのつながりを感じられる環境づくりを大切にしている。

連携により生まれた効果（まとめ）

社会福祉協議会



地域住民
(中学生)



中学生と乳幼児親子が顔見知りになることで、地域で出会った時などお互いに関わり合いが生まれる土壌となっている。中学生にとって「支えられる側から支える側へ」の一步となるとともに、保護者等にとっても若い世代に経験を伝える機会になっている。中学生の中には広場で育ったこともおり、支援の好循環が生まれている。

社会福祉協議会



地域住民
(地域ボランティア)



地域住民がボランティアとして、あるいは広場の近くに立ち寄ったときに乳幼児親子を見守ることができるようにすることで、自然とこどもの育ちに関心を持ちながら、地域全体でこどもの育ちを支えることにつながっている。

今後の展望

地域に根差した広場に親子やプレママプレパパが集い、地域住民と自然に触れ合うことは、地域力の向上にも好循環を与えている。担い手の高齢化に伴う若手育成にも取り組む必要があり、広場を継続していくためには資金面の解決も急務だと考えている。

**大田区
社会福祉協議会**

23

「ご近所さん事業」は、産前2か月から子どもが1歳になるまでの家庭を対象とした、地域住民による訪問型支援事業である。月に一度、地域住民ボランティアである「ご近所さんサポーター」が対象家庭を訪問し、地域の情報を直接届け、核家族化や共働きで孤立しがちな保護者等の不安に寄り添っている。

ボランティアのサポーターは主に30代から80代の子育て経験のある「先輩ママ」たちが中心で、30代、40代の子育て現役世代も活動している。

保護者の方からは、妊娠期の身体的な相談、高齢出産などの悩みを聞いています。実家が遠くて頼れる親族がいない方も多く、夫婦だけでどう乗り切るか悩んでいる家庭もあるのが実情です。

共働き世帯が多く、地域とのつながりが少ない家庭も多いので、毎月、地域の児童館で開催されるひろばの情報や、地域のイベント情報、社協が独自に作成しているこども食堂のマップをお渡しし、こども連れで行ける地域の居場所を伝えるようにしています。

サポーターは「地域の先輩」としての経験を活かしながらも、常に相手を主体とした温かな「寄り添い」を活動の核としています。



ご近所さん事業 担当
鎌田氏

地域住民ボランティアと協働するための工夫

ボランティア活動の実施前には約1時間の面談を行い、①傾聴、②地域への橋渡し、③きょうだいの話も聴いてあげる、の3つの核をサポーターに伝えている。やりたい気持ちのある人にはまず登録してもらい、家庭との相性も考え、必要があれば「絆サポート事業」など、別のボランティアに入ってもらうなど工夫をしている。

ご近所さん事業のボランティアに参加する地域住民にとっても、産前2か月～1歳になるまで各家庭を継続的に訪問するので、そのこどもの成長を保護者と一緒に楽しみ喜び合ったり、ボランティア自身が元気をもらうことができている。また民生委員・児童委員がボランティアとして訪問することもあり、民生委員・児童委員が開催しているひろばの情報を届けるなど、地域交流の窓口にもなっている。

地域住民ボランティアの負担軽減のための工夫

家庭訪問後は、各ボランティアがオンラインのフォームで各家庭の状況を報告し、気になることがあればLINEを通じて社協側にすぐに連絡することもできるようにしている。産後うつが深刻なケースなどもあるが、特に支援が必要な場合は、社協を通じて区の保健師やこども家庭センターに繋ぐことができるようにしている。

連携により生まれた効果（まとめ）

社会福祉協議会



地域住民



地域住民の目線から保護者等の悩みに寄り添うことで、専門職では難しい地元住民ならではの情報提供や相談支援を実施できている。

社会福祉協議会

民生委員・
児童委員

児童委員・民生委員がボランティアとして活動に参加することで、児童委員・民生委員と乳幼児親子の関わりを生み出すとともに、地域の情報を直接届けられている。

今後の展望

一時的な支援に留まらず、20年、30年先を見据えて、地域に根ざした支え合いの精神を育てていくことで、地域住民が自発的に関わり合い、共に育つ「支え合いの文化」を地域に根付かせていくことを目指している。また、利用者が将来的に、サポーターとして活動するという支え合いの循環ができることも目指している。

より詳しく知りたい方はこちら：<https://www.ota-shakyo.jp/>

11 奈良市 社会福祉協議会

社会福祉協議会

地域住民と共に、地域の福祉力・福祉の地域力を高める

奈良県奈良市



基本情報

法人名 : 社会福祉法人奈良市社会福祉協議会
所在地 : 奈良県奈良市杏町79番地の4

活動地域の概要

人口 : 約34.75万人（うち高齢人口11万人）
特殊出生率 : 1.10(R5年)
活動地域の
特徴 : 高齢化率 31.6%
: 高齢化や独居、8050問題、多世代交流の希薄化等の課題を抱えている。

ビジョンとの関係性

ビジョン5

様々な専門職や多世代の地域住民が関わり合いながらこどもの育ちを支えている点は、ビジョン5のこどもを支える環境や社会の厚みを増すことに寄与している。

活動の理念

「ひとりぼっちゼロ」を理念に、当事者・家族を真ん中にして、地域住民と専門職が『協働』して支え合い、困りごとを「その人だけの問題」にせず、地域全体で協議し、必要な場や仕組みを共に創り出すことを大切にしている。また、一方的な支援ではなく、ボランティアや高齢者など関わる全ての人が役割（出番）を持ち、活動を通じて相互にエンパワーメントされる（元気になる）関係性の構築を目指している。

取組事例

01

ほかほか組・おふくわけルームの取組

社会福祉協議会

地域住民

「ほかほか組」は0～3歳の親子向けのひろばで、かつて幼稚園だった空間をリノベーションして生まれたコミュニティスペース「鳥見ふらっと（まんま）」で地域住民により実施されている。鳥見ふらっとには年齢や障害の有無等を問わず多様な住民が訪れるため、「ほかほか組」に参加する親子とも自然な交流が生まれる場となっている。また「おふくわけルーム」は奈良市内の福祉事業所の一室で地域住民により実施されている、食料配布と居場所づくりを兼ねた取組で、毎週180名ほどのこどもが訪れている。

地域で「キラッと光る人」を活動に巻き込むことの意義

社協への相談をきっかけに地域とのつながりが生まれた住民が、現在では地域リーダーとして活躍している。単に社協に寄せられる課題を受け止めるだけでなく、地域のつづきや専門職が把握している課題を、対話を通じて共有しながら、住民自身の主体性を育んできた。

こうしたプロセスを経て、自ら行政に必要な支援を求めるなど、地域課題を自分ごととして捉え、行動する「キラッと光る人」へと変容しており、取組を推進する上で欠かせない存在となっている。

先輩お母さんたちが地域ですごく楽しそうに活動している姿を見て、自分も地域のためにできることをしたいと思い活動するようになりました。今も楽しんで活動することが、若い世代に関わってもらおう上で、一番大切なことだと思っています。

地域で孤立している若い保護者の方が、「おふくわけルーム」に定期的に来られる中で、地域のおばちゃんたちがこどもと一緒に見守ったり、何気ない会話や食事を共にする時間を重ねる中で、徐々に笑顔を取り戻していく姿を見てきました。地域住民の「ただそばに」家族のような温かい関わりが、専門職に相談するほどでもないけれど、困りを抱えている家庭などにとっても、重要な心の支え（セーフティネット）になっているのだと思っています。



鳥見地区社会福祉協議会
会長 奥村麻希子氏

「こあらっこ」と「こあらば」について

「こあらっこ」は閉鎖された子育て広場の元スタッフが結成したサークルで、地域共生拠点「こあらば」で月1回活動している。

「こあらば」は西地区の地域共生拠点であり、奈良市社協が、子どもに関わる多くの団体と共に「ひとりぼっちゼロを目指す」という目標をどのように実現していくか話し合い、ネットワークで一緒に進めているプロジェクトでもある。

小中学生の不登校支援に関わる中で「もっと小さい頃にこうして話を聞いてくれる人がいたら」という保護者の声を聴きました。「こあらっこ」での子育て支援の中で、乳幼児期からタイムリーに不安・悩みを解消できるようにすることが、将来子どもが幸せに暮らせる時間を増やすことに繋がられるんじゃないかと思って活動しています。

保護者には「できるときにできることを少しでいいのよ」と伝え、未来のボランティアの種まきを行っています。子ども「人のためになってよかった」と親が幸せを感じる姿を見ているはずですし、こういったボランティアにしかできない役割があると思っています。



こあらっこ
中本まさ子氏

様々な地域住民と共に活動を作り上げる

「こあらば」には18歳までの子どもや高齢者含め様々な地域住民が訪れ、気になる親子がいれば、団体同士で情報共有することもある。現在も「こあらば」の全体会議においては「どんな子どもに出会い、どのような思いで活動しているか」という個人の思いを語り合う時間を最も大切にしている。

そのような団体間のつながりがあり、育てにくさを感じる親への専門的な助言が必要だと感じていた「こあらっこ」と、臨床心理士がより多くの親子に出会う機会を探していた「YouYouクラブ」が協働し、遊びの場を通じた発達相談が実現されるなどの成果を上げている。

「ころりんく」について



二名地区にある多世代の居場所。気軽に相談できる場が必要だという思いから立ち上げられ、誰でも利用できる食堂やカフェを運営している。



生活支援コーディネーター
馬淵あゆ子氏

子どもも親も、高齢者も孤立している現状がある中で、地域全体で孤立を解消できる場が必要だということから「ころりんく」ができました。子育て支援員や看護師などが「地域のおばちゃん」として活動し、子どもに関わりたい若者・高齢者もサポーターとして活躍しています。「ころりんく」があることで、進学してばらばらになったお友だちに会ったり、園や学校で関係性が作りにくい親子が地域とのつながりを持つこともできています。「しんどいことは見えにくい」ということも忘れずに、子どもを中心に地域住民が繋がれる場を創っています。

地域で子育て 幼稚園跡地を拠点とした多様な居場所づくり

「ころりんく」では、これまで地域との関わりが少なかった50代男性がスタッフとして活躍したり、自信をなくした女性が絵の才能を発揮したりと、子どもだけでなく多様な大人が役割や居場所を見つけ、相互にエンパワーメントされる場となっている。こうした地域共生の地盤に加え、廃園を活用した先行事例「鳥見ふらっと（まんま）」の成功がモデルとなり、二名幼稚園跡地を新たな地域拠点として再生させる住民主体のプロジェクトも加速している。

また、生活支援コーディネーターと連携する「子どもコーディネーター」も活躍している。

今後の
展望

各拠点の連携を強め、活動を「点」から「面」へ広げることを目指す。具体的には、子どもの声を聴くアドボカシー活動や、二名幼稚園跡地の拠点化など住民主体のまちづくりを推進。さらに、しんどい時にすぐ頼れるよう、身近な暮らしの中での居場所づくりや、それを支える地域活動の仲間づくりについても進めていきたい。

12 神河町民生委員 児童委員協議会

民生委員
児童委員
協議会

民生委員・児童委員とともに地域のこどもを支える厚みを増す

兵庫県神崎郡神河町



基本情報

団体名	: 神河町民生委員児童委員協議会
所在地	: 兵庫県神崎郡神河町栗賀町630番地（神崎支庁舎内）
開庁日	: 8:30～17:15
閉庁日	: 土日祝

活動地域の概要

人口	: 9,926人（R7年12月時点）
特殊出生率	: 0.95（R4年）
活動地域の 特徴	: 神河町では、都市部では体験できない自然環境を生かした教育にも力を入れている。「町全体でこどもを育てる」という意識が強い。

ビジョンとの関係性

ビジョン3／ビジョン5

妊娠期からの関係性作りをベースに、こどもが成長しても自然と関わりが持てるような地域づくりを実践している点は、ビジョン3の推進に寄与するものである。

また、様々な専門職や多世代の地域住民が関わり合いながらこどもの育ちを支えている点は、ビジョン5のこどもを支える環境や社会の厚みを増すことに寄与するものである。

活動の理念

住んでいる地域が良くなってほしいという想いの下、自分のこどもだけでなく「地域のこども」としてこどもを育てることを大切にし、妊娠期からの関係性作りをもとに、その後こどもが成長しても自然と関わりが持てるような地域づくりを実践している。

取組事例

01

多世代でこどもの育ちを支える取組

民生委員・
児童委員

地域住民

民生委員・児童委員は親世代・祖父母世代のことも知っているため、自ずと家族背景を含めた見守りができている。保健師との細やかな情報共有（訪問後の報告用紙など）だけでなく、こどもと接点の少ない高齢者や、年下の子と触れ合う機会の少ない中高生も見守り、町全体でこどもを育てる文化の一翼を担っている。

多世代で / 多職種でこどもの育ちを支える地盤となったもの

「地域のこどもはみんなで見守り、時には叱れる」という関係性を大切にしており、地域全体でこどもを見守る地盤がある。また専門職の間でも、それぞれの立場から見えている課題を日頃から密に共有しており、次のページで紹介するプレマカフェの活動に繋がるなど、地域全体での協働が図られている。

この地域は民生委員・児童委員の認知度がかなり高く、民生委員・児童委員になる方も、自分の地域を良くしたいという思いのある人が多いと感じます。

民生委員・児童委員の顔と、地域住民の顔、いろいろな顔を持ちながら活動を行い、無理のない範囲で自分ができることをやっています。民生委員の中にはこどもと一緒に歩きながら登下校の見守りをしたり、除夜の鐘をつきに來た方に食事をふるまったりする方がいたり、それぞれが楽しみながら活動を続けています。

民生委員が「地域のおせっかいおじさん・おばさん」として、より深く、かつ自然に家庭に関わり続ける仕組みが活動を支えています。



神河町民生委員児童委員協議会
会長 高崎彌生氏

2か月に1回開催されるプレママカフェに民生委員・児童委員が定期的に訪問。保健師、助産師、栄養士、歯科衛生士など様々な専門職が関わり、こどもの身体測定や講演、保護者同士の横のつながりを作る取組をしている。

民生委員・児童委員はこどもを見守ったり、保護者等への声かけや行政だけではできない関係性作りのサポートをしている。

また、妊娠中に築かれた関係性をベースに、出産後には民生委員・児童委員による赤ちゃん訪問も行っており、小学校での家庭訪問も含め、切れ目なくこどもの育ちを見守っている。



主任児童委員という立場で担当地区がないため、こどもと関われる現場を探す必要がありました。そんな時、保健師からの声掛けでプレママカフェの運営を手伝い始めたことがきっかけになります。

プレママカフェは、かつては児童館で取組を実施し、出産後の保護者同士の集まりに行きやすくなるように工夫していました。今は保健センターでの実施となっていますが、児童館と連携した取組も今後また実施したいと思っています。



神戸町民生委員児童委員協議会
主任児童委員 森本浩子氏

地域住民の一員である民生委員・児童委員が関わることの強み

プレママカフェの保健師との相談で、保護者の最近の様子を聴きながら困りごとを引き出したり、他地域から転入し、仲間づくりの輪に入りにくい保護者等への声かけ、つながり作りが難しい保護者同士の会話を優しくサポートするなど、行政職員ではなかなかフォローが難しい部分を児童委員・民生委員が支えている。

実践のポイント：自治体や保健師との密な連携体制

保健師と民生委員・児童委員との関係性がとても密で、情報交換が日常的に行われている。

赤ちゃん訪問をするときも、事前に保健師が民生委員・児童委員が訪問予定であることについて保護者等に説明している。また保健師が聞き取ってほしい事項をまとめた報告様式を渡し、民生委員・児童委員が質問や見守りをしやすくとともに、気になることがあれば行政の専門職にすぐ報告できるようにしている。

特に保健師が要保護児童対策地域協議会に参画するようになり、民生委員・児童委員からの情報提供も入るようになったことで、ハイリスク家庭への対応スピードが早くなった。

連携により生まれた効果（まとめ）

民生委員・
児童委員



保健師



地域住民の目線からこどもを見守っている民生委員・児童委員の気づきを、こどもの支援の中核を担っている保健師と密に共有できる関係性があることで、こどもへの支援を手厚く、素早く実施できる。

また、行政だけでは難しい、地域住民との繋ぎの役割を民生委員・児童委員が担うことで、親子の育ちを支えている。

今後の展望

昔ながらの遊び（竹馬、独楽など）の伝承や多世代交流を通じ、高齢者から中高生までが若いこどもと関わる機会を創出することで「他人の子でも地域の子として見守り、時には叱れる」ような、温かくも頼もしい交流と行政の「公助」と地域の「共助」を融合させ、町全体で一つの家族のように寄り添う体制を深化させたい。

13 北区民生委員 児童委員協議会

民生委員
児童委員
協議会

地域の中で親子を支える、民生委員・児童委員による切れ目のない見守り

東京都北区



基本情報

団体名 : 北区民生委員児童委員協議会（赤羽北地区）
所在地 : 【北区福祉部地域福祉課】
東京都北区王子本町1-15-22 北区役所第二庁舎3階
【子ども未来部子どもわくわく課】
東京都北区滝野川2-52-10 北区役所滝野川分庁舎1階

活動地域の概要

人口 : 367,350人(R8年2月時点)
特殊出生率 : 1.00(R5年)
活動地域
の特徴 : 昔ながらの商店街が多く残る一方で、静かな住宅街も広がっており、子育て世代にとって住みやすい環境が整っていて、「切れ目のない支援」を目指した子育て施策に力を入れている。

ビジョンとの関係性

ビジョン3／ビジョン4／ビジョン5

民生委員・児童委員が児童館等を拠点に親子と関わり、妊娠期から乳幼児期の保護者等の不安に寄り添って必要な支援につないでいること、また乳幼児親子を含む多世代の関わりを生み出している点は、地域全体でこどもの育ちを支える基盤づくりとして、ビジョン3、4、5の推進に寄与している。

活動の理念

地域の児童館等を拠点に、民生委員・児童委員が乳幼児の親子と日常的に関わり、「地域のこどもは地域で育てる」という考えのもと、妊娠期から切れ目なく見守りと支援につなげる基盤づくりを目指している。

取組事例

01

子育て応援隊の取組

民生委員・
児童委員

公認心理師

北区には、20館の児童館、子ども・ティーンズセンターがあり、乳幼児から中高生までが利用できる地域の居場所になっている。その一つ「浮間子ども・ティーンズセンター（児童館）」では、子育て相談や地域の世代間交流の場となっている。地域の民生委員・児童委員は、行政と連携し「子育て応援隊（子育てアドバイザー）」として、乳幼児親子が集まる交流活動や誕生日会などに参加し、親子と顔を合わせながら見守りを行っている。身近な地域の大人として保護者等の悩みや不安に寄り添い、必要に応じてセンター職員や公認心理師等の専門職につなぐことで、地域の「相談の入口」として日常的な見守りを担っている。

1歳の誕生日会から生まれる相談の入口：みんなでお祝い輝きバースデー

上記の取組の一つが、満1歳を対象に月1回開催される誕生日会「みんなでお祝い輝きバースデー」である。開催は、同センターで行われ、こどもが同じ月に生まれた親子が集い、交流しながら成長を祝う場になっている。

長年、児童館を知ってもらい地域とのつながりをつくることを目的に、民生委員・児童委員が招待状を保護者等に手渡しするなど参加のきっかけづくりを行ってきた。近年は、共働き世帯の増加や社会状況の変化を踏まえ、案内は郵送を基本としつつ、民生委員・児童委員は当日の会に参加した親子に声をかけ、交流を後押ししている。同じ月生まれの親子の出会いがその後も続くつながりとなり、地域での見守りや支え合いへ広がっている。

お母さんたちは、離乳食の作り方ひとつでも「これでいいのかな？」と誰かに話したい時があります。

私たちは身近な地域の大人として声をかけ、心配なことがあればセンターの職員や公認心理師などの専門職につなぎながら、安心して子育てができるよう支えています。

ここで出会った親子の成長を地域で見守れることが、大きな喜びです。



北区民生委員・児童委員
長谷川佐知子氏

北区では、児童館や子ども・ティーンズセンターを拠点に、民生委員・児童委員、保護者等、地域住民、児童館職員等がメンバーとなり「児童館ネットワーク事業」を実施している。

本事例の地区では、浮間子ども・ティーンズセンター、赤羽北児童館、袋児童館の3館が一つのグループとなり、親子や多世代が交流できるイベントを企画・実施している。

民生委員・児童委員もイベントの企画段階から参画し、当日は親子や中高生に声をかけながら見守りを行い、安心して参加できる雰囲気づくりを支えている。



北区
民生委員・
児童委員
松澤久美子氏

児童館のネットワークの中で保護者の方や子どもたちと関わることで、地域にどんな親子がいるのかを知ることができます。ここで出会った子どもが成長し、小学生、中学生になっていく姿を見守れることが、地域で活動する大きなやりがいです。

地域と共に切れ目なく育ちを支えるための取組

本地区のネットワーク事業では、3館と民生委員・児童委員、保護者、地域住民が顔を合わせ、地域の状況を共有しながら企画を作っている。交流の機会を継続して重ねることで、困りごとが生じた時に互いに声をかけ合い、相談や支援につながりやすい地域の土台を育んでいる。

乳幼児から中高生まで、地域で育ちを支えるネットワーク

本地区のネットワーク事業では、民生委員・児童委員も参画し、保護者等や職員とともに「地域の親子が参加しやすい企画」を話し合いながら作っている。

クリスマスイベントなどでは、中高生がボランティアとしてサンタ役を担い、乳幼児親子と遊びや交流を通じて関わる機会を設けている。普段は接点の少ない乳幼児親子と中高生が同じ場で過ごすことで、乳幼児側には「地域に見守られている」という安心感が生まれ、保護者同士の会話も自然に広がる。中高生側にとっても、サンタ役などの役割を担い、乳幼児親子と関わる経験の中で、自己肯定感や自己有用感につながっている。

民生委員・児童委員は当日、親子と中高生の間に入り、声かけや見守りによって安心して交流できる雰囲気を整えるとともに、保護者等が気軽に話せる関係づくりを支えている。こうした世代間交流の積み重ねが、乳幼児期から中高生になるまで、地域の中で子どもの成長を見守り合う好循環を生み出している。

行政との連携

行政が子育て応援隊などの「場」と「仕組み」を整えることで、民生委員・児童委員は地域の身近な存在として力を発揮し、顔の見える関係づくりの担い手として、地域の中での存在感が高まっている。地域と行政の協働により、民生委員・児童委員は交流や見守りを通じて親子と関係を築くことができ、さらに地域に継続して住む民生委員・児童委員が親子と関わり続けることで、支援が切れ目なくつながりやすくなっている。

連携により生まれた効果（まとめ）

民生委員・
児童委員



児童館



児童館での交流を通じ、子育て家庭との「顔の見える関係」が生まれ、地域全体で安心感のある相談環境を構築できている。

また、ネットワーク体制があることで地域の状況を共有しやすくなり、地域の実情に合った企画づくり・運営につながっている。

民生委員・
児童委員



地域住民
(中高生)



乳幼児期から関わった子どもの成長を地域で継続的に見守ることができ、多世代がつながる地域の基盤づくりにつながっている。

今後の 展望

妊娠期の方に児童館・子どもセンターの存在や役割が届きにくい面があるため、保健センター等と連携し、早い段階から周知・来館につなげ、安心して子育てできる地域づくりを目指す。

大阪府豊中市第1地区 14 民生・児童委員協議会

民生委員
児童委員
協議会

幼児教育・保育施設と民生委員・児童委員の連携

大阪府豊中市



基本情報

団体名 : 豊中市民生・児童委員協議会
第1地区主任児童委員連絡会
所在地 : 大阪府豊中市中桜塚2-29-31地域共生センター東館2階
開館時間 : 8:45～17:15
休館日 : 祝休日／年末年始

活動地域の概要

人口 : 398,056人 (R8年1月時点)
特殊出生率 : 1.29 (R6年)
活動地域の
特徴 : 豊中市は転出入者が多い地域。市のアプリやママたちが作成する情報誌など、行政・市民レベルで活発な情報発信が行われている。

ビジョンとの関係性

ビジョン5

主任児童委員が保育園等に定期的に訪問したり、赤ちゃん訪問を行う中で、地域住民の立場からこどもの育ちを見守る取組を行っている点は、**こどもの育ちを支える環境や社会の厚みを増す**ことにつながっており、ビジョン5の推進に寄与している。

活動の理念

主任児童委員は0歳から18歳までのお子さんを見守ることが職務となっているが、0歳児のこどもの情報はなかなか入ってこないのが現状。「地域の赤ちゃんの育ちを見守りたい」「地域のこどもは地域で育てる」という思いの下で活動を進めている。

取組事例

01

「いかのおすし」キャラバン隊

民生委員・
児童委員
幼児教育・
保育施設

主任児童委員が、活動地域内の幼児教育・保育施設、小学校を訪問。年長児や小学校1年生を対象に、こどもたちが一人で登校するようになって、知らない人について行かないよう、こどもの防犯対策用の標語である「いかのおすし」を用いて伝えている。先方のオファーを受け、現在は年に約20か所を訪問している。

※いかのおすし…警視庁が考案したこども向けの防犯標語

「いか」ない・「の」らない・「お」おごえをだす・「す」ぐにげる・「し」らせる

取組を実践するまでのプロセス

主任児童委員が園・小学校と関係を築くことが容易ではない中、現状を打開する工夫が必要だという思いから2008年から開始した。別地域で取り組まれていた「いかのおすし」の紙芝居を、許可を得た上で実施することにした。

現在は、①紙芝居、②寸劇、③ダンスの3本仕立てで、計40分程度のプログラムをしています。

年長児、小学校1年生の2回にわたってプログラムを実施することで、こどもたちにもより内容を覚えてもらえるように取り組んでいます。

先生方のみならず、こどもたちにも主任児童委員の存在を知ってもらえることは大きいです。特に園や学校との関係づくりは大切で、プログラムでの関わり以外に、各園の入園式などにも出席しています。

こどもたちに楽しく学んでもらいながら、自分の命を守ることにつなげてもらえたらと思っています。



豊中市民生・児童委員協議会
第1地区主任児童委員連絡会
代表 酒元氏

豊中市が実施する「こんにちは赤ちゃん事業」において、市の委託を受けた訪問員と共に、生後4か月までのこどもがいる家庭を主任児童委員が同行訪問している。

地域住民の目線で保護者等の思いや困りごとについて傾聴し、民生委員・児童委員も運営に協力している子育てサロンの案内などもしている。

個人情報保護の観点から地域の赤ちゃんの情報が把握しにくい中、地域の赤ちゃんの育ちを見守りたいという思いの下、乳児家庭全戸訪問事業が全国で始まったときに、地域として協力したいと市に申し出たことで、現在の協力体制が構築された。

特に支援が必要だと感じた場合には、訪問員を通じて、行政の支援センターに報告する体制がとられています。ただ、気になるご家庭には、主任児童委員が赤ちゃん訪問のあとに個別に家庭訪問して、その後の様子を伺ったりすることもあります。

町で「赤ちゃん訪問に来てくださった方ですね」と保護者の方から声をかけてもらうこともあり、主任児童委員の存在を知っていただくきっかけにもなっています。

専門職による支援だけではなく、地域住民同士での見守りがあることは大切だと思っています。



豊中市民生・児童委員協議会
第1地区主任児童委員連絡会
以後氏



豊中市民生・児童委員協議会
第1地区主任児童委員連絡会
大里氏

切れ目なく育ちを支えるために

民生委員・児童委員も運営に協力している子育てサロンでは、保護者等が大人同士で話せる機会を作ったり、一息ついてリフレッシュできるように支援・応援をしている。

市の事業として行われる赤ちゃん訪問は、はがきでお知らせをしたあとに各家庭を訪問している。ありのままの家庭の様子を把握することで、その後の支援に繋げている。子育てが大変な中での訪問ではあるが、主任児童委員の声かけによって、保護者も徐々に心を開き、打ち解けて話を聞くことができています。

「はじめの100か月」の親子と地域のつながりで大切にしている観点

転入者や出産直前まで仕事をしていた保護者等の中には、身近な公園の場所などもわからず、困っているケースがある。豊中市では市独自にまちの情報誌も作成しているほか、市内で当日開催されている子育てサロンの情報などがわかるアプリも配信されている。そのような情報誌やアプリも紹介しつつ、地域のこども食堂、駄菓子屋、スーパー、歩いて行ける公園など、住民目線での情報を提供することを大切にしている。

連携により生まれた効果（まとめ）

民生委員・
児童委員



幼児教育・
保育施設



幼児教育・保育施設等と連携することで、主任児童委員が定期的に地域のこどもと関わる機会を得ることができている。結果として、地域でこどもを見守る厚みが増している。

民生委員・
児童委員



自治体



地域住民の一員である強みを生かして、自治体のみでは対応が困難な、保護者等の心情に寄り添った相談支援、情報提供を行うことができています。

今後の 展望

主任児童委員の視点から見てきた課題をもとに取組みを拡げながら、地域全体でこどもの育ちを支えていきたい。

多職種による「はじめての100か月の育ちビジョン」推進のための懇談会

「はじめての100か月の育ちビジョン」のさらなる推進に向けた懇談会が開催されました。本事例集で紹介した、全国各地で先進的な取り組みを行う幼児教育・保育施設、子育て支援施設、社会福祉協議会の職員、民生委員・児童委員、医療関係者など多様な参加者が集結。「こどもの育ちを支える環境や社会の厚みを増す」をテーマに、職種の垣根を越えた連携のあり方や、地域住民を巻き込むヒントについて、現場の熱を帯びた活発な議論が交わされました。



実施概要

- 開催日 : 2026年2月24日（火）
開催時間 : 14:30～16:30
開催場所 : ミーティングスペースAP虎ノ門
東京都港区西新橋1丁目6-15 NS虎ノ門ビル
開催形態 : 参集とオンラインの併用によるハイブリット形式(Zoom)
- 【事業運営委員】
・医療法人社団千実会 理事長
あきやま子どもクリニック 院長 秋山千枝子氏
・東京都立大学健康福祉学部看護学科
教授 安達久美子氏
- 参加者 :
・社会福祉法人雲柱社 地域子ども家庭支援センター光が丘
所長 新澤拓治氏
・社会福祉法人浄勝会 小池保育園 園長 松延毅氏
- 【こどもにかかわる専門職の皆様】
ヒアリング対象団体より18名

次第

1. 開会挨拶・事業概要説明
2. 参加者自己紹介
3. 事例紹介
4. 質疑応答
5. グループディスカッション
6. 各班発表
7. 全体での議論
8. 閉会



参加者の声

「参考になった事例や、グループディスカッションで印象に残った意見」は？

- ✓ 「つながりたいと思ったらつながりに行く。そういった思いのある仲間がたくさんいることを心強く思いました。」
- ✓ 「幼児教育・保育施設で実践されていた、地域の高齢者と乳幼児のかかわりについての事例が参考になりました。保育所を多機能化させるみなさまの情熱がすごかった。」
- ✓ 「中学校での乳幼児とのふれあい体験学習。中学生との交流が定期的にあることで、将来、家庭を持ったときや悩みがあったときに、顔の見える関係が築けているところが素晴らしいと感じました。」

懇談会開催に対する感想

- ✓ 「どう地域との関係をつくっていくのか知りたい。このような、全国での交流の機会が定期的にあるとよいと思いました。」
- ✓ 「他職種、多職種とのつながりがこれからの活動に大事だと気づかせていただきました。」

懇談会を振り返って

懇談会では、幼児教育・保育施設を地域に開くことで実現した地域協働、園内への「高齢者クラス」の設置、キーパーソンとなる地域人材を職員がうまく活動に巻き込む体制づくりなど、多彩なアイデアが飛び交いました。そこで共通して浮かび上がったのは、「自施設だけで抱え込まず、思い切って地域へ開いていく」ことの重要性です。

結びに、新澤拓治委員から「すべてのこどもにリーチするには、すべての大人が関わらなければ届かない」との力強いメッセージが送られました。専門的な立場でこどもの育ちに関わる人がハブとなり、地域と手を取り合うことこそが、こどもの育ちを支える厚みをさらに増していくための第一歩だと確信できる時間となりました。

専門的な立場でこどもの育ちに関わる人としてすぐに実践できることは何か？

事例集を最後までお読みいただき、ありがとうございます。本事例集では、全国各地で「はじめの100か月の育ちビジョン」を体現し、こどもと保護者等に日々伴走している皆様の素晴らしい取組をご紹介します。幼児教育・保育、子育て支援、社会福祉、医療、地域など、様々な分野でこどもの育ちに関わっている皆様は、こどもの育ちを支える上で特別な存在であり、ビジョンを推進するためのキーパーソンです。複雑化することも・子育てに関する悩みを、一つの職種や施設だけで抱え込む必要はありません。

事例から見てきた、明日からすぐに実践できる「小さな一歩」のヒントをまとめました。

目の前の保護者等の不安を「まるごと」受け止める（寄り添い）

こどもの健やかな育ちには、最も身近な存在である保護者のウェルビーイングが欠かせません。こどもの育ちを支える立場として「知識や助言を伝える」だけでなく、保護者等と一緒に悩み、気持ちに寄り添い、時には「ただそばにいる」関わりも求められます。日々の関わりの中で保護者の小さな声や不安を丁寧にすくい上げ、安心できる居場所をつくることから始めてみましょう。



施設内の「スタッフ同士」で語り合う（理念の共有）

施設内で「何のためにこの支援をしているのか」という活動理念を共有することが重要です。日々の気づきや迷いをスタッフ同士で語り合う場を作りましょう。

さらに、本事例集の様々な取組事例に触れ、改めて「自分たちの施設ではどのような支援ができそうか」と一緒に考える時間を設けてみてください。



職種や施設の枠を超えて「顔の見える関係」を築く（多職種連携）

幼児教育・保育、子育て支援、医療など、それぞれ異なる視点を持つ専門職が互いの知見を共有することで、こどもと家庭を多角的に理解することができます。まずは地域の他の専門職や支援機関にも関心を持ち、情報交換の場に参加したり、気になる家庭について相談し合ったりする「顔の見える関係」を作ることが、切れ目のない支援への第一歩となります。



地域社会に開き、多様な人々の「出番」をつくる（社会の厚み）

こどもの育ちは、こどもに関わる専門職だけでなく、地域全体で支えるものです。施設を地域に開き、学生や高齢者、地元企業など、これまで接点の少なかった多様な人々がこどもに関わる機会（出番）を創出しましょう。専門的な立場でこどもの育ちに関わる皆様が地域のハブ（つなぎ役）となることで、社会全体でこどもを見守る社会の厚みをさらに増すことができます。



「はじめの100か月」を地域全体で支えるための答えは、一つではありません。まずは、本事例集をきっかけに、ご自身の施設内や地域のネットワークの中で、「私たちの地域では何ができるか？」を語り合うことから始めてみませんか。



皆様のその小さな一歩の積み重ねが、
すべてのこどもや保護者等が
安心して育つことのできる社会へとつながっていきます。



専門的な立場でこどもの育ちに関わる人へ向けた はじめての100か月の育ちビジョン取組事例集

令和8(2026)年3月発行
株式会社 船井総合研究所

この冊子は、こども家庭庁「幼児期までのこどもの育ちに係る基本的なビジョン」策定後の具体的な取組推進（科学的知見の充実・普及に向けた調査研究（こどもに関わる専門職による「はじめての100か月ビジョン」の推進）に係る委託事業で実施した調査と下記の調査研究委員会の有識者との検討をもとに作成しました。

調査研究委員

（敬称略 五十音順）

- | | |
|----------|-------------------------------|
| ● 秋山 千枝子 | 医療法人社団千実会 理事長 あきやま子どもクリニック 院長 |
| ● 安達 久美子 | 東京都立大学健康福祉学部看護学科 教授 |
| ● 新澤 拓治 | 社会福祉法人雲柱社 地域子ども家庭支援センター光が丘 所長 |
| ● 松延 毅 | 社会福祉法人浄勝会 小池保育園 園長 |